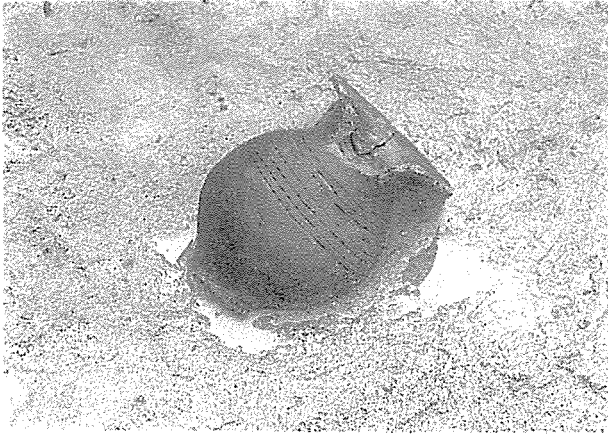


第七章 弥生時代



壺形土器の出土状況（須磨区戎町遺跡）

第一節 水稲農耕の開始と発展

第二節 高地の村・低地の村

第三節 祭祀と埋葬

第一節 水稻農耕の開始と発展

1 最古の農耕集落

水稻農耕技術 紀元前三〇〇年ごろ、中国・朝鮮から水稻農耕の技術・文化を携えた人たちが少なからずの伝来経路 日本列島へ渡来し本格的な稲作農耕が開始される。

彼らは、まず北九州の一角に定着し、やがて西日本各地に水稻農耕の技術を伝える。以後、三世紀後半に巨大な古墳が出現するまでの時代をわが国では「弥生時代」と呼びならわしている。

中国大陸における稲作農耕は、アッサム・雲南の照葉樹林地帯から中国の長江下流域へ、そして華中・華北へと伝えられたといわれており、さらに日本列島への伝播経路についてはいくつかのコースが推定されている。

かつて柳田国男が推定したように、中国南部から南西諸島を経て九州に上陸するコースについては、わが国における本格的な稲作農耕が北九州を中心とした地域ではじまり、南九州においては一〇〇年以上も経過したのちに稲作農耕社会へ入ったと推定されているので、最も早い時期に南西の島伝いに稲作農耕技術が伝

来したとする可能性は低い。

おそらく中国大陸の南部から山東半島近くまで伝えられた稲作農耕技術が、この地方から直接に北部九州へ伝えられたか、あるいはさらに朝鮮半島南部を経由して日本列島に伝播したのではないかといわれている。朝鮮半島における農耕の開始は、紀元前三〇〇〇年前ごろからアワなどの栽培がはじまり、紀元前一〇〇〇～三〇〇年ごろには稲作農耕がはじまったと推定されており、朝鮮半島がわが国における稲作農耕の開始に深くかかわる地域であったことは確実である。

北九州の一角に水稲農耕の村を定着させた渡来人の一部は、瀬戸内海沿岸部を東へと向かって移動し、また同時に日本海沿岸部をも東へ向かって移住して、わずか一〇〇年あまりの間に、太平洋沿岸では伊勢湾付近、日本海沿岸では若狭湾あたりまで水稲農耕の技術・文化を伝えた。したがって、東部瀬戸内に面する神戸市域付近には、比較的早い時期に水稲農耕が伝えられたにちがいない。

弥生時代の

弥生時代は、その発展段階を、前期・中期・後期の三期に大別することが多い。それらの各

時期区分

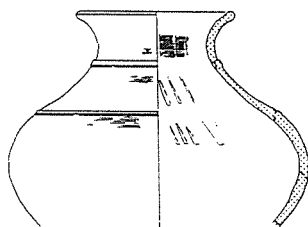
期を前半・後半あるいは前葉・中葉・後葉に細分することもある。また、土器の形式変遷を

指標として、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期・Ⅴ期に区分することもあり、その場合は、おおむねⅠ期を前期にあて、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期を中期に、Ⅴ期を後期として取り扱っている。各時期の実年代については、まだ十分に研究が進んでいないが、おそらく前期は紀元前二世紀およびそれ以前を、中期は紀元元年を中心として前後各一〇〇年を、そして後期は二～三世紀の年代をあてることができであろう。

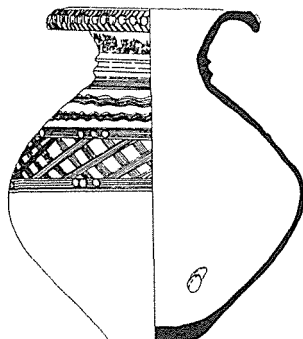
表 50 弥生時代略年表

期	年代	内 容
前 期	B.C. 200年	水稲農耕・金属器の使用 臨海平野先端の砂堆に集落営まれる・北青木遺跡 環濠集落あらわれる・大開遺跡 高床倉庫出現する 銅鐸の祭り始まる
	B.C. 100年	周溝型・台状型墳丘墓の築造始まる・玉津田中遺跡 東海地方まで水稲農耕広まる
中 期	西暦紀 元ころ	中核的集落が成立する・本山遺跡 ・雲井遺跡・新方遺跡 桜ヶ丘1号銅鐸鑄造される 同4・5号銅鐸鑄造される 高地性集落が営まれる
	100年	石器が消滅，鉄器の使用進む
後 期	200年	土器製塩始まる 集落が低地へ進出する・西区吉田 南遺跡 大形墳丘墓の築造が盛んになる・ 東部瀬戸内・近畿・出雲 堅穴住居が方形化する 邪馬台国女王弥呼の活躍 銅鐸の祭り終わる

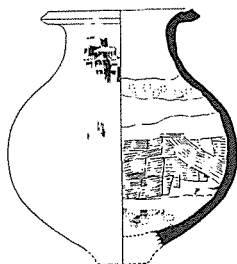
(壺形土器の変遷縮尺不同)



北青木遺跡



森北町遺跡



玉津田中遺跡

市内最古の 従来縄文時代晩期として取り扱われていたような時期の稲作農耕開始期については、弥生時
農耕集落 代早期あるいは先I期というように表現されることが多い。神戸市域においては、早期（先

I期）に属する確実な遺跡は見出されていないが、この期に属する可能性の高い水田址が須磨区戎町遺跡の
下層から発見されている。

神戸市域における最古の弥生遺跡は、古くから明石川流域の吉田遺跡であろうといわれているが、最近の
土木工事に伴う発掘調査では、市内各地で前期の遺跡が発見されており、吉田遺跡と同時期あるいは相前後
する時期の遺跡ではないかと推定される例も知られてきている。

最古の農民たちは、まず、各地の臨海平野の先端部に形成されつつあった砂堆上さたいたいにその集落を営み、付近
の後背湿地あるいは砂堆間湿地に水田を造成しはじめていたと推定される。

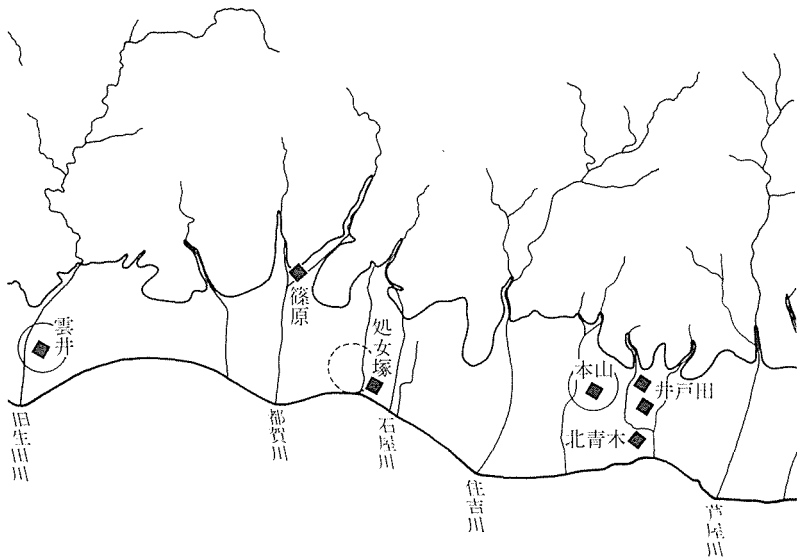
縄文時代晩期から弥生時代前期前半へかけての時期は、気温がやや低下し、いわゆる小海退期にあたって
おり、臨海平野先端部の砂堆上は、生活の舞台としては比較的安定した時期にあたったのであろう。

北青木遺跡

六甲山南麓の平野部でこれまでに発見されている最古の農耕集落は東灘区北青木遺跡きたあおぎである。
芦屋川と住吉川の中間の標高約三メートル付近に位置する集落は、臨海平野に形成された五

列の砂堆のうち四列目の砂堆上に位置し、南側に存在する三列目の砂堆との間の湿地に水田を営んでいたと
推定されている。

発見された遺物は、弥生土器（壺、甕、鉢、壺蓋、ミニチュア土器）、石鏃、石錐、木製農耕具（鍬、鋤）、斧柄、
織物具などで、土器は前期中葉でも前半に属する特色をよく示している。このように最古の農耕集落では、



中核的集落の分布(六甲山地南麓)

木製の鋤・鍬などの耕作用具をもち、収穫用具としての石庖丁を伴っており、すでに完成された農耕技術を大陸から受容していたことは確実である。なお、発見された土器のうち約一〇%の土器には、原料となる粘土(胎土)に角閃石を含み、チョコレート色に焼き上がった河内平野産、より緻密にいえば生駒山地西麓でつくられた土器を含んでおり、この地域の農耕集落の形成にあたって、西からの影響ばかりでなく、東の河内平野からの影響も無視できないことを示している。

北青木遺跡と同じように、臨海平野先端部に砂堆を形成するような地形は六甲山南麓の平野部の各所で認められるが、特に旧荻藻川(新湊川)の河口両側に大規模に発達している。また、明石川の河口両岸にも砂堆が発達しているが、すでに市街化が進行していて同時期

第一節 水稲農耕の開始と発展

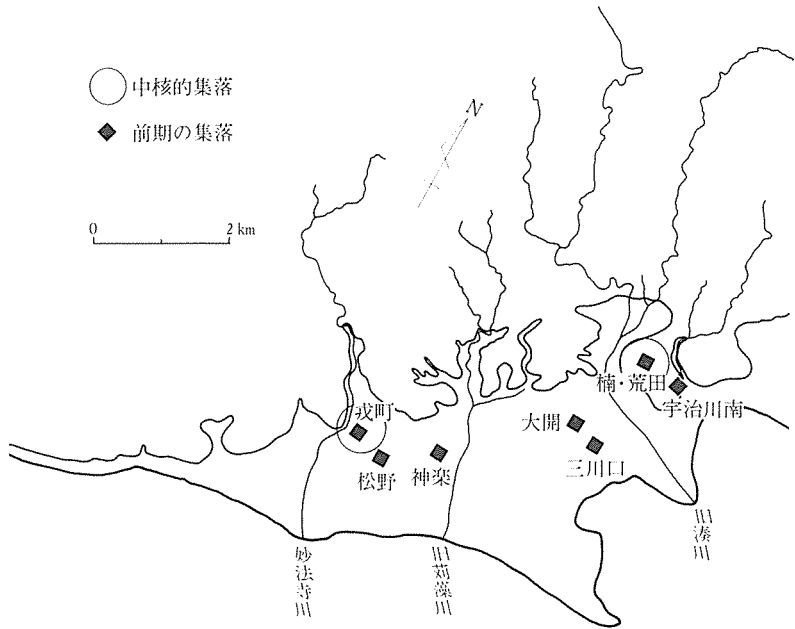


図 122 弥生時代前期の集落および

の遺跡は未発見である。

六甲山地南麓 前期後葉になると、北青木

の前期の遺跡 遺跡周辺では、本山南町六

丁目、若干の遺物が採集されているほか、

さきにふれた縄文海進期の汀線（海岸線）より

も高位の本庄町や本山中町付近から集落址が

発見されている。北青木遺跡が一時期のみの

集落であったと推定されているのに対して、

本山中町周辺では、弥生時代中期以降も集落

を形成しており、砂堆上の集落に比して著し

く安定した生活の場であったことを示してい

る。

なお、この縄文海進期の汀線から臨海平野

先端部の砂堆までの四〇〇〜四五〇メートル

にわたる沖積地が、前期後半以降に水田とし

て利用されていたであろうことは確実である。

弥生時代前期後葉という時期は、北青木遺

跡の周辺で集落が増加するばかりでなく、六甲山地南麓の各所で集落が形成されはじめる。

石屋川西岸の東灘区御影塚町の処女塚古墳付近にもこの時期の集落が存したらしく、処女塚古墳の盛土中や、墳丘南側の砂堆から同時期の土器片が採集されている。付近は石屋川の形成する扇状地の末端部で、かつ縄文海進期の汀線付近にあたっており、墳丘基底部の標高は約四メートルである。

また、市街地のなかの遺跡として知られている中央区雲井遺跡も前期後葉の遺跡としての特色をよく示している。雲井遺跡はJR三ノ宮駅の東側に位置し、旧生田川の形成する扇状地末端で標高約一二メートル付近に前期後半の遺物包含層があり、その前面に旧生田川河口に発達した砂堆の後背湿地が広がっている。

旧神戸市街地の西半部でも同様の状況が知られており、宇治川と旧湊川との中間の中央区宇治川南遺跡は、標高約一〇メートルの段丘上に位置し、それほど広くはないが臨海平野を望む位置を占めていたことが知られる。

貯蔵穴が群在する 宇治川南遺跡の西南約四〇〇メートルの洪積段丘上に位置する楠・荒田町遺跡は、他の

楠・荒田町遺跡

前期の遺跡に比して若干高位の標高約一五メートル付近にあり、西側から南側へかけての旧湊川沿いの低地を耕作したらしいことが知られる。遺跡の広がりには、まだ十分に明らかでないが、東西三〇〇メートル以上の範囲から遺物が発見されており、前期末から中期初頭にかけての貯蔵穴と推定される土坑が五〇基近くも発見されている。この土坑は、直径・深さともに一メートル内外の、円筒形あるいは上部が狭く底部が広い袋状の断面をもつ遺構で、一般には貯蔵穴であろうと推定されている。

こうした弥生時代の貯蔵穴の分布をみると、北部九州および本州西端部の関門地方に多く、それ以东では

播州平野の加古川市東神吉遺跡、大和盆地の唐古遺跡などで知られている。いずれも前期から中期初頭のものが多く、一〇基から一〇〇基程度が群在することが多い。貯蔵穴の機能については、前期にすでに存在していると推定される高床倉庫との関連において検討しなければならない。高床倉庫には穀物類を、貯蔵穴にはその他の野菜やイモ類を、というふうな推定できれば理解しやすいが、貯蔵穴内から稲束、粃穀の出土した例も知られているので、いちがいにその機能を決めがたい。楠・荒田町遺跡の貯蔵穴からは、イチイガシの実、ムクロジの実、炭化米、魚類やウシの歯骨などが発見されており、穀類の貯蔵については高床倉庫との併用が推定されるほか、縄文時代以来の備荒食の保管、動物性食料の腐敗防止など多様な利用方法が推定される。また、この貯蔵穴には覆屋あるいは蓋状の施設が存在した可能性もあり、土坑中央に柱穴状の穴をもつ例もある。

砂堆上に

旧湊川や旧苅藻川・妙法寺川などの流路が、弥生時代にどのような状況であったかは、まだ十分に分りませんが、砂堆上に立地したであろうことは十分に予測できる。

並ぶ集落

分に解明されていないが、その河口付近には東西に長く砂堆を形成しており、最古の農耕集落が、この砂堆上に立地したであろうことは十分に予測できる。

これまで知られている遺跡は前期後葉の例が多いが、昭和六十三年（一九八八）になって調査された大開小学校校庭からは、前期前葉の竪穴住居群やそれを囲む環濠などの遺構・遺物が発見されつつある。

兵庫区三川口遺跡は、標高二・三メートル前後の低地に位置し、縄文晩期後半、弥生前期後葉、中期初頭の遺物が出土しており、旧湊川下流の砂堆上の集落の片鱗をみせている。また旧苅藻川流域の長田区神楽遺跡や妙法寺川に近い長田区松野遺跡でも前期後半の特徴をもつ土器片が発見されており、当時の人々の生活

の舞台が、この砂堆上であったことを証明している。

なお、旧湊川から妙法寺川へかけての地域は、海岸近くの砂堆から縄文海進期の汀線までの距離が、広いところでは八〇〇メートル、狭いところでも五五〇メートルもあり、東西約四キロメートルにわたって低地が広がっている。この低地の北側に位置する長田区長田神社境内遺跡や須磨区戎町遺跡で前期後半の遺物が発見されているが、さらに遺跡数は増加することが予測される。

水田が発見さ 山陽電鉄板宿駅南側の須磨区戎町遺跡は、妙法寺川に近い標高約一四メートルの、扇状地
れた戎町遺跡 末端から平坦地へ移るあたりに位置し、前期後半の河道とその周辺から多量の弥生土器と

広鍬などの木製農耕具およびその未製品、石庖丁などが発見されている。また、この旧河道内には円形に杭を打ち込んだ特殊な遺構が三カ所発見されており、木製農耕具の製作過程で、木材および未製品を水に浸しておく施設ではないかと推定されている。

さらに、さきにふれた縄文時代晩期の水田とは地点がやや異なっているが、前期後半の遺構面より下層から小区画の水田が発見されている。水田の規模は最小のものが一・三×二・三メートル、最大のものが二×四・三メートルで、調査区内からは三四枚が確認されている。この水田の時期については、遺物が全く発見されていないので確定しがたいが、前期中葉までさかのぼることは確実である。

明石川流域の 明石川下流域には三列の砂堆が知られているが、市街化が進んでおり、この砂堆上からは
前期の遺跡 まだ弥生時代前期の遺跡は発見されていない。

明石川流域最古の農耕集落は、古くより西区枝吉の丘陵上に位置する吉田遺跡だといわれている。

第一節 水稻農耕の開始と発展

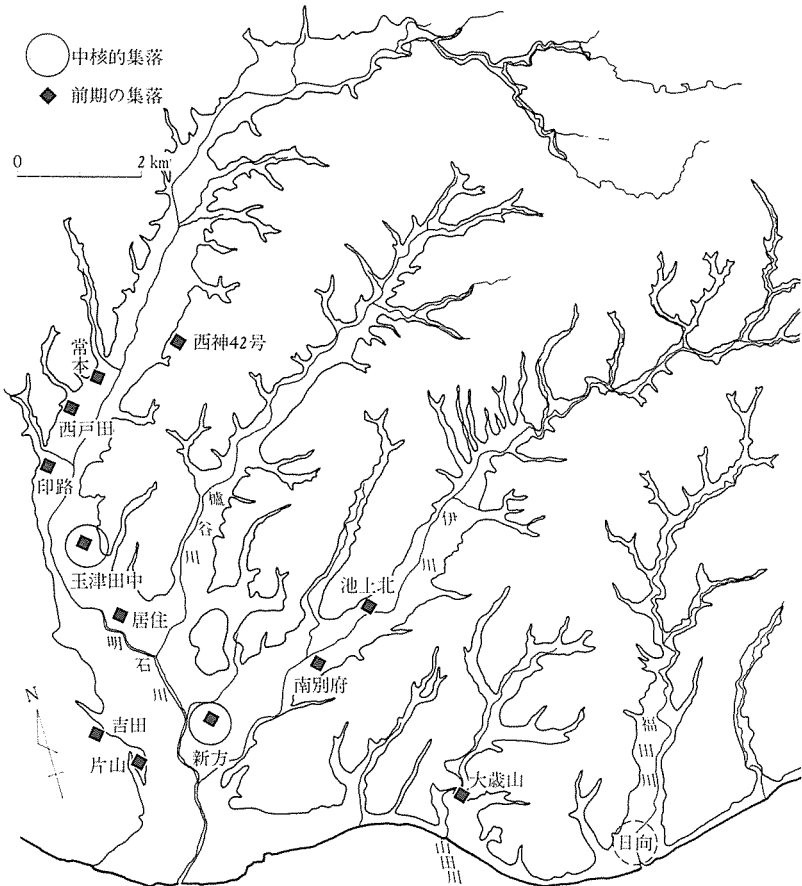


図 123 弥生時代前期の集落および中核的集落の分布(明石川流域)



写真 93 弥生時代前期の竪穴住居(西区玉津田中遺跡)

低地の集落で吉田遺跡と同時期か、やや遅れて成立したと推定されるのは、明石川東岸の標高九メートル付近に位置する新方遺跡しんぽうと、標高一八メートル付近に位置する玉津田中遺跡である。

前期後葉になると、集落の数はさらに増加し、明石川流域では、玉津田中遺跡よりも下流の居住遺跡や今津遺跡が知られているほか、玉津田中遺跡より約二・五キロメートル上流の西戸田や常本にも集落が形成され、明石川の支流伊川流域の南別府でも同時期の遺物が出土している。また、東の山田川流域の大歳山にも集落が形成されたことが知られる。

吉田遺跡は、明石川西岸の標高約二〇メートル付近の丘陵上にあり、東側丘陵下の低地が水田であった可能性が高い。出土遺物は、前期前半の土器のほか、石鏃、磨製石斧などが知られているが、中期以降の土器も発見されているので、石器類の時期は決めがたい。

吉田遺跡と同じ丘陵の南約八〇〇メートルの位置に片山遺跡があり、吉田遺跡に続く時期の土器が出土している。この両遺跡の立地は、東側の低地との比高が一〇メートルもあり、前期の集落の立地としては、はなはだ特異である。したがって、より古い弥生遺跡が低地部において今後発見される可能性は高い。

新方遺跡は、明石川の支流伊川が、東北から本流へ流入する付近の北側に位置し、前期中葉以降、中・後

期まで続く大規模な遺跡であるが、明石川本流に近い場所から前期の土器が出土している。

玉津田中遺跡は、明石川東岸に広がる低地に位置するが、前期、中期、後期と局部的には若干位置を移しながら、弥生時代全期間にわたって集落が継続しており、東西・南北ともに約五〇〇メートルにわたる大集落である。そのうち前期の集落は南北約一〇〇メートル、東西約六〇メートルの微高地上にあり、円形の堅穴住居や土坑が発見されている。円形堅穴住居は南北四・八メートル、東西四・四メートルで、壁溝はなく、柱は四本で、住居址床面中央に不整円形の炉址がある。また、最近の調査では、付近から前期の方形周溝墓群が発見されつつある。

武庫川中流域
の前期の遺跡

近年まで前期の遺跡が知られていなかった六甲山北側武庫川中流域の北区塩田遺跡や三田市中遺跡、三輪餅田遺跡などから前期後半の遺構・遺物が発見されている。

とくに対中遺跡では水田や井堰が発見されているが、井堰は川幅約二メートルの小川を、幅二〇〜三〇センチメートル、厚さ二〜三センチメートルの板を二列に打ち込んで直角にせき止めている。この井堰によって水位をあげた水を小川から枝分かれした幅約七〇センチメートルの数本の用水路に導いていたようであり、当時の水利技術の実態を知ることができる貴重な例である。付近から発見された水田遺構からは人間や動物の足跡も多数検出されている。

弥生時代前期の遺跡数と縄文時代のそれとを比較するとき、わずか一〇〇年あまりの期間にいかにもその数が増加しているかが知れよう。それは、稲作農耕の開始と発展が、縄文時代の生産活動と対比するとき、いかに多くの人口を支えうる生産力を持ちえたかを如実に示しているといえよう。

2 中核的集落の成立

中核的集落の分布 臨海平野先端部の砂堆上に成立した最古の農耕集落は、前期後半から中期初頭には姿を消してしまふ。不安定な集落立地を放棄して、新しい土地を求めた原因は、前期末から中期初頭へかけての一時的な海進による土地条件の変化に由来するものであらうと推定されるが、集落の拡大化にともないより広い平地を占めうる場所を求めたのであらう。

神戸市域においては、まだ十分に当時の土地条件の変化を示す資料は確認されていないが、大阪湾沿岸地域の河内平野では、各所でその痕跡をみることができるとして、この小海進期を境にして、洪水による砂礫の急速な堆積がみられ、場所によっては○・五〜二メートルもの堆積が記録されている。

神戸市域では、この小海進期以後、集落の多くは縄文海進期の汀線より上位のより安定した地域へ居を移し、大規模かつ継続的な集落を形成する。

六甲山地南麓では芦屋川と住吉川の中間に位置する本山遺跡、旧生田川に近い雲井遺跡、旧湊川に近い楠・荒田町遺跡、妙法寺川に近い戎町遺跡などがその代表例である。

このような集落は、長期間継続するだけでなく、それぞれの地域の集落群のなかで大規模かつ中核的な位置を占めており、歴代遺跡・母集落・拠点集落などさまざまに呼ばれているが、いずれの呼称を用いるにしても、一つのまとまりをもった地域内に分布する集落群の中核的な集落であったであろうことは確実である。

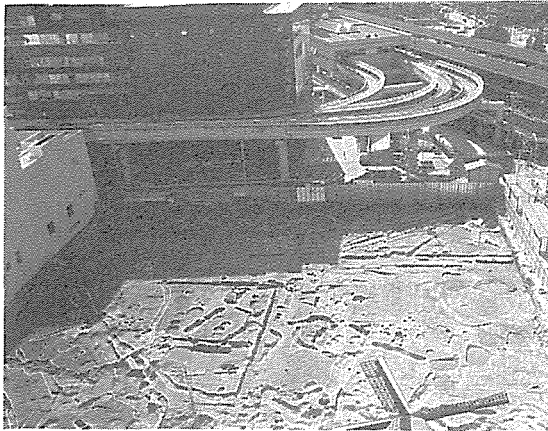


写真 94 旧生田川東岸の中核的集落(中央区雲井遺跡)

こうした中核的な集落は西日本各地で知られており、それぞれ四キロメートルないし五キロメートル程度の間隔をおいて分布しているが、河内平野や大和盆地のような地域では面的な広がりをもって分布しており、六甲山地南麓や和泉平野では縄文海進期の汀綿より上位に線的に連なっている。

六甲山地

南麓

神戸市域では本山遺跡から雲井遺跡までの距離は約八キロメートルで、平均的な間隔の二倍近くもあり、その中間に今後中核的な集落が発見される可能性を示している。距離的にみてちよ

うど中間にあたる地域は、石屋川と都賀川の中間で、前期後半から後期へかけての土器が出土した処女塚古墳付近から現在の阪神電鉄新在家駅付近が想定できる。この地域にはのちに桜ヶ丘銅鐸・銅戈発見地や処女塚古墳などが存在し、今後十分に注目されるべき地域である。

あるいは、この六甲山地南麓のように、東西に長い平野部を、南北に流れる河川が分断しているような地形の地域では、河川と河川によって区画された地域ごとに、中核的集落を設定する方が妥当かもしれない。

また、雲井遺跡と楠・荒田遺跡間は約三キロメートル、楠・荒田遺跡と戎町遺跡間は約四キロメートル強であるが、ここでも楠・荒田町遺跡と戎町遺跡との中間の長田神社付近に、

もう一カ所中核的集落を想定できるかもしれない。

戎町遺跡以西明石川流域までは、可耕地の豊かな地域はなく、五キロメートルという標準的な距離は参考にすることはできない。戎町遺跡以西明石川流域の新方遺跡までの中間で、これまでに知られている比較的大規模集落をあげるとすれば、山田川流域の大蔵山遺跡であろう。しかし、大蔵山遺跡では中期の遺構・遺物が不明確であり、むしろ最近調査が進んでいる福田川河口の西側日向遺跡付近から今後大規模な中核的集落が出現する可能性を推定しておきたい。戎町遺跡と日向遺跡間は約八キロメートル、日向遺跡と新方遺跡間は約七キロメートルである。

河内平野を中心として、東の大和盆地・南の和泉平野・北の淀川流域・西の猪名川・武庫川下流域とがそれぞれ同じネットワークによって結ばれているような状況と、六甲山地南麓西端部と東播地域東端の明石川流域とが、全く同じような関係にあるのかどうかはにわかに決しがたいが、戎町遺跡を中心とした地域と、新方遺跡に代表されるような明石川流域の社会とが、直接的であるにせよ、中間に集落群を介在させるにせよ、何らかの形で交流していたことは土器の形態・文様などによってうかがい知ることができる。

明石川流域

明石川流域では新方遺跡と北方の玉津田中遺跡との距離は約三キロメートル、さらに上流に中核的な集落を求めるとすれば玉津田中遺跡の上流約二・五キロメートルの西戸田・常本両遺跡あたりにその存在を予想できるかもしれない。

なお、さらに西方の加古川平野との関連をみれば、明石川流域の新方遺跡からの直線距離で一・二キロメートルの位置にある播磨町大中遺跡の存在が重要である。

三田盆地

武庫川中流域に目を転ずれば、支流有馬川が本流に合流するあたりから有馬川と長尾川・有野川の合流地点までの南側の、標高一五〇メートルあたりの低地に位置する塩田遺跡は、前期後半後期にわたる遺跡で、中・後期の住居は四群程度の小支群にわかれており、それらが集まって一集落を形成していたらしい。遺物としては磨製石剣、磨製石庖丁などの出土が目されるが、特に磨製石庖丁は製品・未製品をあわせて数十点も出土しており、集落内での消費をこえる量であり、この集落に製作所の存したことを示している。

塩田遺跡の西北方約三キロメートルの、水田との比高約一五メートルの高位段丘上に位置する三田市天神遺跡は、中期はじめから後期にいたる東西約三〇〇メートル、南北約二〇〇メートルにおよぶ大集落であることが知られている。なお、この三田盆地における弥生文化の成立は、西摂平野との深い関係において成立したであろうことは、その出土土器の形態・文様などからみて確実である。

以上のような中核的集落がはたす役割は、それぞれの地域における水田耕作を主とした生産活動において、中心的役割を果たしたばかりでなく、人間の動きとそれに伴う情報や物資の中継的な役割をも果たしていたであろうことは想像にかたくない。

戒町遺跡における木器製作、玉津田中遺跡や塩田遺跡における石庖丁製作などはすでに触れたとおりであるが、のちに述べる石器の原材料としてのサマカイトや土器の移動・流通にもおそらく中核的集落が深く関わっていたであろうことは確実である。

3 石器と土器が語る交流

石器の原産地推定 縄文時代や弥生時代の遺跡から発見されるさまざまな遺物のうち、最も多量に出土するのは石器と土器である。石器は、金属器が出現する以前の主要な利器として使用されたものであり、

土器は煮沸用や貯蔵用の生活用具として、日常生活のなかで欠かせない道具であったことはいうまでもない。こうした石器や土器の原料の産地を推定し、当時の人々の行動範囲や交流・交易の様子・文化圏などを探ろうとする研究は、近年、自然科学と考古学の学際的研究の進展によって大きく発展した。

西日本における石器の原材料の多くは、安山岩の一種でサヌカイトと呼びならわされている石材である。大阪湾沿岸地域におけるサヌカイトの産地は、河内平野と大和盆地の中間に位置する二上山とその周辺が古くからよく知られている。

近年、西宮市の甲山や、淡路島の北端岩屋付近から産する円礫なども注目され、瀬戸内中部の讃岐平野西端に位置する金山かなやまなどとともに、西摂から播磨へかけての地域の石器石材の多様性が説かれてきた。

京都大学原子炉実験所の藁科哲男・東村武信らによって、昭和四十五年（一九七〇）ごろから遺物を損傷することなく元素組成を分析し、原産地を推定する方法として蛍光X線分析法という非破壊分析法が進められてきているが、蛍光X線分析法とは、黒曜石やサヌカイトなど石器の原材料の主成分組成が産地ごとにほとんど差がないのに比して、微量に含まれている不純物は産地ごとに異同があり、その元素組成のパターンを

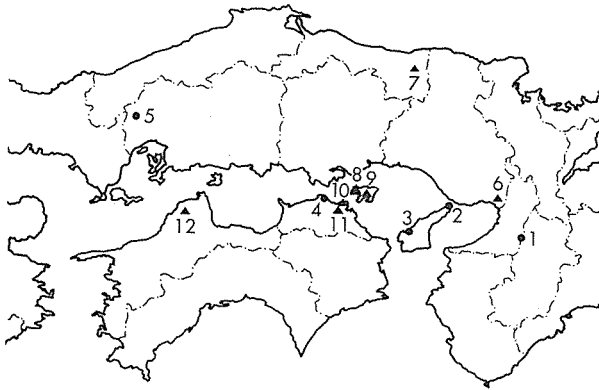


図 124 瀬戸内東部のサヌカイト原産地

- 1 二上山地域、2 岩屋地域、3 淡路島中部地域、4 金山・五色台地域、5 冠山地域、6 甲山、7 馬ノ山、8 豊島、9 小豆島、10 屋島、11 紫雲山、12 皿ヶ峰地域
 ●：石器原材として良質とみられる産地
 ▲：あまり良質でないと思われる産地

分析することによって産地を特定しようという方法である。

西神戸の石器
 原材料の産地
 推定できる。

神戸市内の各遺跡から発見されたサヌカイト製石器・石材の産地分析は比較的多量に行われていて、特に明石川流域においては弥生時代前期から中期末まで全期間の流れの概略が

まず、東播地域の東端部に位置する山田川流域の縄文時代前期末および弥生時代前期の遺物を中心とする大蔵山遺跡の出土遺物五一点についての分析をみると、産地が推定できる試料のうち岩屋産が七四・七％で、それに次いで二上山産が二一・六％を占め、両者で九〇％以上を占めている。特に岩屋産として分析されている試料は、地元の垂水礫層に含まれる円礫をも含む総括的な名称であって、ここでは地元産の石材を中心とした材料が多く利用されている点を注目しておきたい。

明石川流域の中核的集落の一つである新方遺跡出土遺物のうち、丁の坪地区のサヌカイトは、いくつかの時期の例が分析されているが、中期初め(Ⅱ期)の例を

みると、二上山産が一六・七％に対して金山産が四三・三％、岩屋産が四〇％を占めており、前期にひき続いて中部瀬戸内地域との関連の深さがうかがわれる。同じ新方遺跡丁の坪地区の中期中葉のうち前半(Ⅲ期前半)に属する試料では二上山産が四四％に対して金山産が四八％を占めており、中期初頭以後、西の瀬戸内中部との交流に加えて東の河内平野部との交流が深まっていることを如実に示している。

新方遺跡の北約五〇〇メートルに位置する今津遺跡は、明石川下流域の東岸沖積地に位置する前期末から中期末へかけての遺跡であるが、中期中葉でも後半(Ⅲ期後半)の試料について行われた分析によると、二上山産が二一・九％、金山産が六五・六％で岩屋産は九・四％を占めている。

また、新方遺跡丁の坪例でほぼ同時期試料(Ⅲ期後半)についてみると、二上山産が一四・三％、金山産が五七・一％、そして地元の岩屋産が二八・六％を占めており、中期中葉に東西の石器原材量原産地からの供給がやや減少したことを示している。

中期後葉(Ⅳ期)になると、二上山産と金山産の比率が逆転する。

伊川東岸の高地性集落・頭高山遺跡における例をみると二上山産が六六・一％、金山産が二五％である。

楯谷川西岸の西神ニュータウン内第65号地点遺跡(以下西神第65号遺跡と略記)でも、二上山産が六四・七％、金山産が二七・五％、そして西神第50号遺跡でも二上山産が六八・四％、金山産が二四・六％で、中期後葉には明石川流域全体が、東方の河内平野周辺部と深いかかわりをもっていたであろうことを示している。

六甲山地 六甲山地南麓部については、まだ試料の分析例は十分ではないが、妙法寺川に近い戎町遺跡の

南麓

前期(Ⅰ期)の資料をみると金山産が五七・七％、岩屋産が一九・二％を占め、二上山産が一九・

第一節 水稻農耕の開始と発展

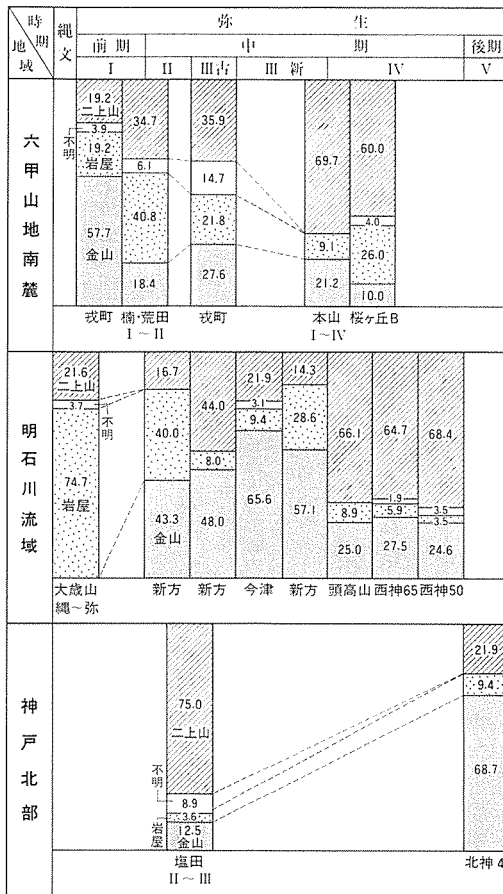


図 125 遺跡別サヌカイトの原産地推定比率 (単位%)

二%と少なく、西方の瀬戸内地方との関連の深さがうかがわれる。

生田川以西の中核的集落の一つ、楠・荒田町遺跡の前期後半から中期はじめにかけての試料の分析結果をみると、二上山産が三四・七%、金山産が一八・四%、岩屋産が四〇・八%であり、戎町遺跡より西方に位置する大歳山遺跡の例と比較すると、二上山産の石材の多さが目をひく。おそらく原産地との距離の近さがあらわれているのであろう。

戎町遺跡では、中期中葉のうち古い段階(Ⅲ期前半)の例も分析されているが、ここでは金山産が二七・六

%、岩屋産が二一・八%と、西方の材料が約五〇%を占めている。これに対して東方の二上山産が三五・九%でさきの楠・荒田町遺跡例に近い数値を示している。

また、神戸市域最東端の中核的集落である本山遺跡のうち田中町一丁目の元清水地点の前期～中期の試料によると、二上山産が六九・七%、金山産が二一・二%を占めており、中期後葉(Ⅴ期)に近い傾向を示している。

中期後葉(Ⅴ期)の高地性集落である桜ヶ丘B遺跡の試料は、二上山産六〇%、金山産一〇%、岩屋産二六%で、岩屋産がやや他の遺跡に比して多い傾向を示している。

北神戸地域

武庫川中流域の中核的集落の一つ塩田遺跡では中期前半(Ⅱ～Ⅲ期)の試料が分析されているが、二上山産が七五%という高率を占め、金山産一二・五%、岩屋産三・六%などが少量もたらされている。この地域が西摂平野を中継地として、河内平野と深くかかわっていたことを示す資料である。

弥生時代における石器は、一般的には中期末には消滅し、後期には、すべての道具が鉄器化したといわれているが、一部の地域では後期の段階においても石器の使用が続くことがある。

たとえば、津山盆地の大田十二社遺跡においては、後期(Ⅴ期)になっても石庖丁をはじめいくつかの石器が使用されていることが報告されている。

武庫川中流域の北神ニュータウン内第4号地点遺跡(以下北神第4号遺跡と略記)においても後期に属するサヌカイトが知られており、二上山産が二一・九%、岩屋産が九・四%で、金山産が六八・七%を占めている。

この時期になると、河内平野に近い二上山付近においては、すでに石器原材料の供給を終わってしまっていたのかも知れない。

前期の土

土器はその生産地によって、それぞれの顔をもっている。使用される粘土、器形、文様、製作器の交流 技法などが、それぞれに、あるいは総合されてその製作地を推定することができる。

弥生時代から古墳時代へかけての土器のなかで、最もよくその生産地の特徴を示しているのは河内の土器と呼ばれるわさわれている生駒山地西麓産の土器である。原料となる粘土(胎土)に雲母や角閃石を多く含み、チヨコレート色に焼きあげられているので、肉眼観察によっても容易に他の土器と識別できる。そのうち角閃石は斑礫岩や閃緑岩の分布する地域に産する粘土中に多量に含まれていることが知られており、生駒山地西麓の東大阪市を中心とした地域がこの土器の生産地であろうと推定されている。

河内の土器が神戸地域の弥生文化の成立にあたって、深くかかわっているであろうことは、東灘区北青木遺跡で、この地域最古の土器のうち約一〇%が河内系の土器であることによってよく示されている。西摂平野東辺の猪名川下流の豊中市勝部遺跡や、尼崎市田能遺跡のような中核的集落が成立した時期よりは、むしろ量的には多いように思われる。

前期後半の本山遺跡、楠・荒田町遺跡や大歳山遺跡でも河内の土器の存在が知られており、さきにつれた二上山産のサヌカイトとともに、東からの少なからぬ影響を認めざるをえない。

前期の土器のうち、河内の土器とともに生産地の特徴をよく示しているものに紀伊型甕と呼びならわされている甕形土器がある。この甕形土器は、河内の土器に近いチヨコレート色で、胎土に砂粒を多く含み、器

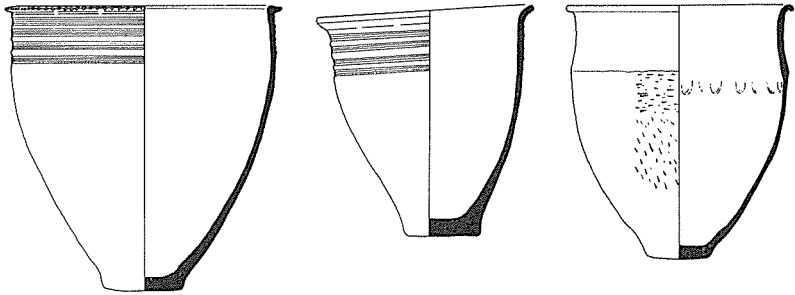


図 126 播磨系逆L字型甕(左)と紀伊型甕(右) (中央は在地型甕)

体の下半部を篋へちまで削って成形しているという特徴をもっている。

この紀伊の土器は、前期末から中期へかけて、六甲山地南麓の楠・荒田町遺跡、明石川流域の新方遺跡、加古川流域の加古川市岸遺跡など、東播平野から西摂の平地にかけての中核的集落において点々と認められ、おそらく淡路島を中継地としての交流が行われていたことを示しているであろう。なお、紀伊産と推定される結晶片岩製の石庖丁も少量ながらこの地域にもたらされているが、同じコースで持ち運ばれたものであろう。

前期後半から中期はじめにかけての甕形土器のなかに、播磨にその分布の中心をもつと推定される土器がある。一般に逆L字形口縁の甕といわれているが、この甕形土器は、加古川流域の加古川市東神吉遺跡の出土甕形土器のうち約三〇%を占めており、六甲山地南麓の楠・荒田町遺跡でも約三〇%を占めているが、その中間の明石川流域の新方遺跡では五%以下である。このことは明石川流域が東西の他地域とは別に独自の道を歩みはじめたことを示すものとして理解できるかもしれない。なお、新方遺跡では逆L字型甕に比して紀伊型甕の比率が大きいことも注目されるし、発見された石庖丁の五〇%以上が在地産(おそらくは上流の玉津田中遺跡産の砂岩製の石庖丁であることも、さきふれた独自性を示す現象であるかもしれない。

中期の土 中期の河内の土器は籐狀文れんじょうもんと呼ばれる櫛描文で飾られることを特色としている。籐狀文で飾ら

器の交流 れた河内の土器は芦屋市会下山遺跡や東灘区金鳥山遺跡で発見されており、その影響を受けて

製作された在地産の籐狀文土器は中央区布引丸山遺跡や明石川流域でも少量ながら発見されているが、それほど強い影響は認められない。

なお、これまでに中期の河内の土器が伝えられた最も西の遺跡は岡山平野の乙多見遺跡おたみであり、北は山城盆地、東は大和盆地、そして南は紀ノ川以南の海南市あたりまで広がっていることが知られている。

こうした中期の河内の土器と在地の土器との比率は、和泉平野では五〇〜一〇〇%の河内系土器を含むことが知られているほか、西摂平野の猪名川下流域では約三%、六甲山地南麓では約一%程度だといわれている。

こうした地域差が、直接それぞれの地域間の親近性をあらわしているかどうかは不明というほかないが、さきにふれた二上山産のサヌカイトの動きと関連する事柄であろうことは推定にかたたくない。

六甲山地南麓の中期の土器は、たとえば楠・荒田町遺跡の出土土器についてみれば、西摂平野東部の猪名川下流を中心とした地域との共通性が強く、西の東播平野との関連はそれほど強くないようにみえる。このことは、さきにふれた前期末から中期はじめにかけての楠・荒田遺跡におけるサヌカイトの産地が金山産の減少に対して二上山産の増加という形で全体の消費量をみだしていることと関連する事柄であろう。

明石川流域では、西区新方遺跡出土の中期の土器が一括報告されていて、この地域の状況をよく示しているが、注口土器をはじめ西方の山陽地方との関連をおもわせる資料が目立っており、さきにふれたサヌカイトの産地が、中期中葉まで金山産が半数以上を占めることと関連するのかもしれない。

第二節 高地の村・低地の村

1 高地性集落の分布

六甲山地 中期中葉以降、各地で集落の分布に著しい変化が現われる。水田経営が不可能ではないかと思われ、南麓 われるほど、可耕地から遠く離れた高所に集落が営まれることが多くなる。

特に六甲山南側では、北から南へ延びた標高二〇〇メートルを越えるような高所に、いわゆる高地性集落と呼ばれるような集落が点々と出現する。

六甲山地東端近くの西宮市甲山は、西摂平野のいずれの集落からも望見できる位置にあり、古くから神のいます神奈備山として知られている。標高約三一〇メートルの山頂からは銅戈が発見されており、祭祀の場であったことが知られているほか、山頂付近にはサヌカイト片なども散布している。

甲山それ自体が集落の機能をもっていたかどうかは、まだ十分に明らかにされていないが、付近の西宮市五ヶ山・柏堂かやどうなど、いずれも一〇〇メートルを越える高所に集落が存在したことが知られている。

そのうち五ヶ山遺跡は標高一三〇〜一五〇メートルの丘陵上に位置し、東西約三〇〇メートル、南北約五

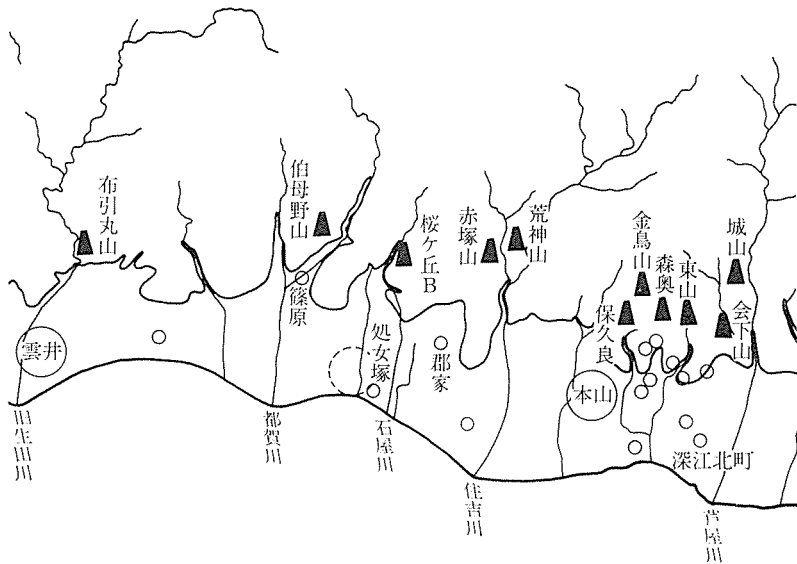
○○メートルにわたる集落で、中期中葉(Ⅱ期)から後期はじめにかけての土器が出土し、中期後半から後期へかけての竪穴住居六棟以上が発見されている。出土遺物のうちには磨製石庖丁が含まれており、農耕にかかわる集落であることを思わせる。しかし、この付近で水田耕作の可能な地を求めるとすれば、仁川下流の現阪神競馬場付近に求めねばならず、その間の距離は一・五キロメートル、比高約一一〇メートルである。また、甲山の南西約一・七キロメートルの柏堂遺跡は、夙川の上流域で、標高約一九〇メートルの丘陵上にあり、石鏃、サヌカイト片のほか後期の土器が出土している。小規模な遺跡ながら、可耕地から著しく離れた高所の集落として注目される。

夙川以西芦屋川までの東西約三キロメートルにわたる地域では、まだ顕著な高地性集落は発見されていないが、芦屋川以西には、芦屋市城山、会下山、東灘区東山、保久良神社境内など高地性集落の分布が濃密である。

このうち最も高所に位置するのは城山遺跡で、標高約二五〇メートルの頂上部からやや下った尾根の凹部で、標高二三〇メートル付近に住居らしき遺構があり、かなりの規模をもつ集落址が発見される可能性があるが、可耕地までの距離は約一、二キロメートル、比高約一八〇メートルである。出土土器からみて、中葉にはじまり、中期後半を中心として後期まで継続する集落であったらしい。

遺跡からの眺望は東西ともにすばらしく、南西約五〇〇メートルの地点には、高地性集落の全貌が学術的な調査で明らかになっている。会下山遺跡の全景を見下ろすことができる位置にある。

会下山遺跡は六甲山南斜面の標高二〇〇～一六五メートルの尾根上に位置し、集落からの眺望は、眼下の



低地の村（六甲山地南麓）

平野部はいうにおよばず、東南方には西摂平野から河内平野、生駒山地から大和の山々、さらに紀伊の山々へと続く大阪湾をめぐる地域を望見することができる。可耕地との比高は約一一〇メートル、直線距離は一キロメートル以上である。また、西方には六甲山南麓の平野部から鉢伏山までの神戸市域を望むことができる。

遺構は、最高所の標高二〇〇メートルあたりから南へ約二〇〇メートル、幅約二五メートルの尾根上に堅穴住居七棟、高床倉庫一棟、祭祀場と考えられる遺構二カ所、焼土坑三カ所、土壘墓四基などが発見されている。

各住居とも二〜三回の増改築が行われたらしく、中期後葉から後期前半にかけての土器が発見されており、土器の総量のうち約七五％は後期のものである。石器類は打製石鏃の

第二節 高地の村・低地の村

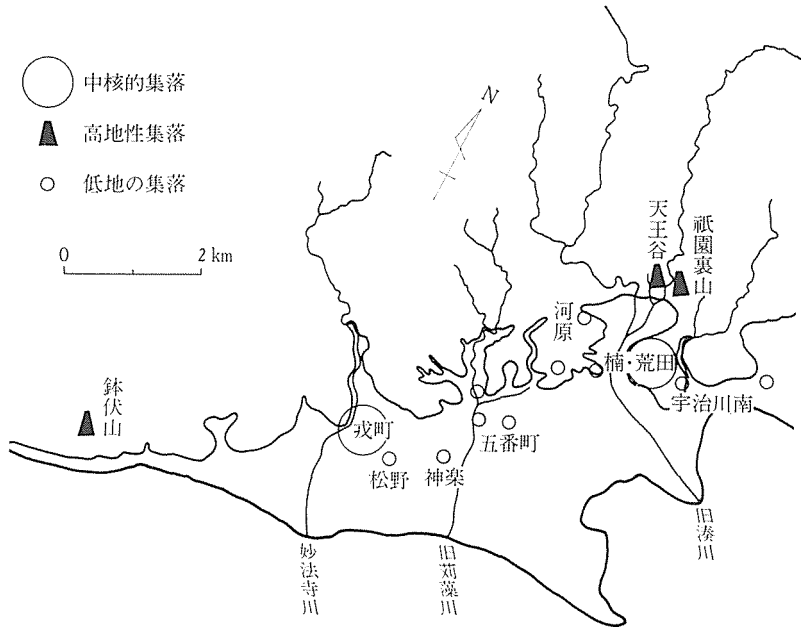


図 127 高地性集落と

ほか磨製の石鏃、石剣、石斧、砥石、石錘、石弾など低地の集落とほとんど変らない組成を示しているが、磨製石庖丁は未発見である。そのほか鉄器類は鉄鏃、槍鉞やぶがね、鉄鑿ののみ、釣針、鉄斧、鉄釘など約二〇点が出土している。また、銅鏃二点が発見されているが、そのうち一点は、中国製と推定される三翼鏃である。

会下山遺跡の西約五〇〇メートルの標高二四〇〜一八〇メートル付近に位置する東山遺跡は、試掘調査の結果、堅穴住居三棟を含む遺構遺物が発見されており、後期を中心とした高地性集落であることが明らかになっている。しかし、中期後半の遺物もいくつか発見されており、地点を異にして同期の遺構が存在する可能性も残されている。なお、集落からさらに高位の、標高三〇五メートルの頂上部に大岩があり、付近からも後期の土器が発

見されているので、高地性集落に伴う祭祀の場が存在する可能性も高い。

東山遺跡の西方約五〇メートルには、古くから灘の一つ火として、瀬戸内海を行く船の目標となっていた保久良神社鳥居前の常夜灯付近に位置する保久良神社境内遺跡がある。遺跡は標高約一八〇メートル、可耕地との比高一四〇メートル余りの、現在神社境内地となっている平坦面を中心に、東西、南北ともに一五〇メートル余りに広がっている。遺跡の各所には古くから磐境いわさかと呼ばれる巨岩が点々と存在し、祭祀遺跡ではないかといわれており、平坦面の西南隅部から大阪湾型の銅戈も発見されている。

発掘調査が行われていないので、くわしい内容は不明であるが、遺物としては中期中葉(Ⅲ期)の土器を中心に中期後半から後期へかけての土器、石鏃、石錐、磨製石斧などが出土している。また、遺跡は北側の金山山側斜面の標高約二二五メートル付近や、西側の小さな谷をへだてた尾根上、さらに南側の標高約一五〇メートルあたりまでのびた尾根の先端などにもおよんでおり、いくつかの地点にわかれて住居群が存在し、全体として一つの集落を形成していたらしいことが知られる。

住吉川上流の東灘区荒神山遺跡も、標高二二六～一七〇メートル付近の尾根上に営まれた集落で、遺物の散布範囲は東西約一五〇メートル、南北約三五〇メートルにもおよぶ大集落で、一六棟の住居址と推定される遺構および中期後半から後期へかけての土器、石鏃、砥石、凹石などが発見されている。

住吉川西岸の、標高約一八〇メートルあたりの丘陵上にある赤塚山遺跡は古くから高地性集落として知られているが、未発掘でその内容はほとんどわかっていない。

また、石屋川上流には灘区桜ヶ丘B地点(標高約一二〇メートル、比高約六〇メートル)があり、都賀川上流の伯

母野山遺跡(標高二〇〇～二五〇メートル、比高約八〇メートル)とともに高地性集落としての高さや眺望の良さをよくそなえている。

伯母野山遺跡以西には、高地性集落の分布は少なく、生田川上流の中央区布引丸山遺跡と、旧湊川上流の天王谷川をはさんで立地する兵庫区祇園神社裏山遺跡(標高約一〇〇メートル、比高七〇メートル)、天王谷遺跡(標高約一三〇メートル、比高一〇〇メートル)が知られているにすぎず、それ以西では須磨区鉢伏山まで高地性集落の存在が知られていない。しかし、この地域に高地性集落が存在しないのではなく、未発見なのであると推定しておきたい。

西摂の平地と東播平野の境にそびえる鉢伏山では、標高約二四〇メートルの山頂および南斜面から中期後半の土器および石鏃・サヌカイト片が採集されており、可耕地から遠く離れたいわゆる高地性集落の一つの典型だといえることができる。また、山頂からの眺望は、南側の明石海峡はいうにおよばず、東側の神戸市街地の西半部、西側の垂水区、西区、明石市の全域を見わたすことができ、高地性集落の機能を考える上で重要な位置を占めている。

明石川流域

福田川、山田川、明石川と続く旧播磨国に入ると、六甲山地南麓のような高地をもたないが、標高一〇〇メートルを越える丘陵上に、いくつかの高地性集落が知られている。

明石川の支流伊川流域の西区頭高山遺跡は、標高約一一七メートルの頭高山山頂からやや下った標高一一五～九〇メートル、可耕地との比高約七〇メートルの尾根頂部および斜面から、堅穴住居一六棟、土器棺墓二基などが発見されており、さらに遺構は広がる可能性をもっている。出土遺物は中期後半の土器のほか、

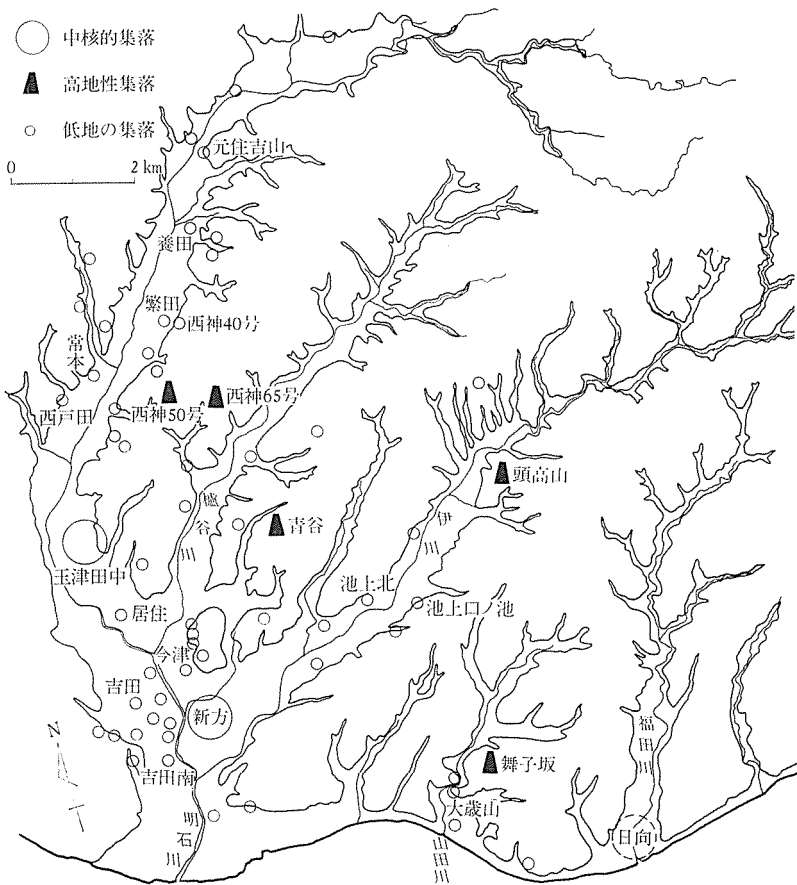


図 128 高地性集落と低地の村(明石川流域)

第二節 高地の村・低地の村

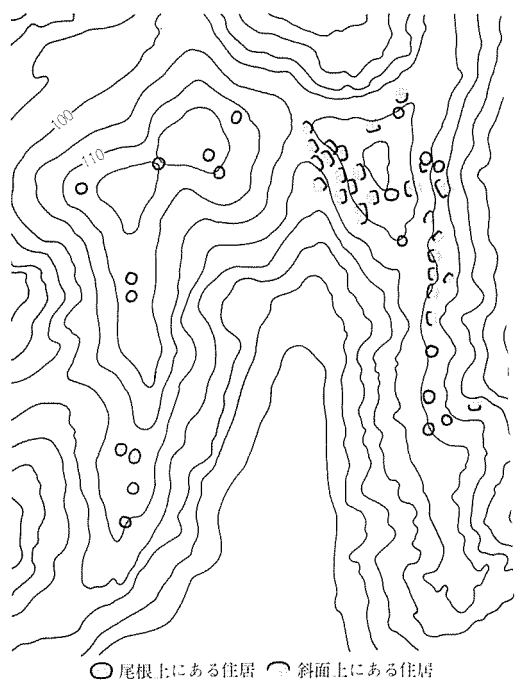


図 129 高地性集落の住居配置
(西区西神第50号遺跡)

石鏃・石錐などの打製石器とその剥片、石剣、石鏃、石斧などの磨製石器および砥石がある。住居すべてが同時に存在したのではなく若干時期差のあるものも含まれている。なお、住居のなかには、石器製作が行われたため多量のサヌカイト片が出土したものもある。

明石川流域で最も大規模な高地性集落は、明石川上流の押部谷と支流の櫛谷川の中間の丘陵上に位置する西神第50号遺跡の集落であろう。標高一〇八メートルあたりから一〇〇メートルあたりまでのコの字形にのびた丘陵の頂部および尾根の両側斜面で、計四〇数棟の竪穴住居が発見されている。三～五棟程度の住居が

一小群を形成し、そうした小群が八～一〇グループにわかれて存在しているようにみえるが、それらすべてが同時期に存在したとは考えられず、中期後半の時期のなかでも、いくつかの小期に区分できるのではなからうか。なお、西北の可耕地との比高は約七〇メートルである。

三田盆地

武庫川中流域の三田盆地でも、中期、特にその後半には、遺跡数が飛躍的に増加



写真 95 高地性集落全景(三田市奈カリ与遺跡)

するが、主として丘陵上に一定の距離を置いて点在する例が多い。

そのうち三田市奈カリ与遺跡は、この地域の高地性集落の実体を典型的に示す一例だといえることができる。

奈カリ与遺跡は、武庫川西岸に続く丘陵の標高二二〇～二〇五メートル、東西約一五〇メートル南北約二〇〇メートルの広範囲を占める大集落である。この位置からは三田盆地が一望でき、周辺の高地性集落のなかでも、中心的な集落であることが知られる。可耕地との比高は約七〇メートルである。

発見された住居址は三〇棟、尾根の頂部に位置するものは少なく、ほとんどが斜面に築かれた堅穴住居である。その分布は一〇程度の小群に分かれるらしく、重複した例もあるが、段状遺構と命名して報告されている遺構も、住居址の可能性があり、同時に存在する住居数を確定することは困難であるが、二〇棟程度の住居が一群を形成していたのではなからうか。

高地性集落の性格

以上のような高地性集落の成因についてはすでに諸説があるが、見張台・烽火台説、防御的集落・山城説、畑作農耕集落説、季節的移動集落説、祭祀的集落説などのほか、最近では自然環境の

変化に伴って、一時的に集落が高所へ移動したとする説も提出されている。

先に列举した高地性集落に共通する特徴は、可耕地から著しくかけはなれた高所に占地しているという特徴のほかに、いずれも眺望のすこぶる良好な地点またはその斜面に集落を形成していることである。しかも数キロメートルを隔てて分布し、相互に視界に入る位置にあるものが多いことは見張所・烽火台説に有利である。

特に鉢伏山山頂遺跡のように、東の六甲山南麓にひろがる臨海平野と、それを見下ろす高地性集落を視野に収めることができ、西の明石川流域のいずれの高地性集落からも望見できる位置にあるような遺跡は、まことに見張台・烽火台にふさわしい立地を占めている。

鉢伏山山頂遺跡と同じく、集落と呼べるほどの遺構は発見されていないが、石鏃・サスカイト片をはじめ若干の同時期と推定される遺物が発見されている西区雌岡山山頂(標高約二五〇メートル)や加古川流域の加古川市神戸町城山遺跡(標高約八五メートル)のように一定の間隔をおいて存在する小規模な高地性集落は烽火台としての機能をもっていたことは確実であろう。なお、鉢伏山―雌岡山間一六キロメートル、雌岡山―城山間は一〇・五キロメートルで、古代の軍制を規定した軍防令に示されている烽火台間の距離四〇里(現在の二二・二六キロメートル)よりもやや狭い間隔をもっているようである。

また、高所の尾根上あるいはその斜面に位置するところから、防御的集落あるいは山城としてとらえ、出土する打製石鏃を武器とみなし、軍事的性格の強い集落としてとらえようとする説もすてがたいが、この地域の高地性集落では、集落を取り巻く環濠や柵列・土塁など防御的施設は発見されていない。また、住居の

分布も、集中的な部分もあるとはいいながら散在的であり、山城の如き施設とは認めがたい。

畑作農耕集落説については、この地域の高地性集落に関するかぎり、急な尾根上またはその斜面に占地する例が多く、地形的にみて可能性は低い。また、祭祀的性格の認められる集落もなくはないが、それはあくまでも部分的・副次的な性格であって、集落全体を規定するようなものではないように思われる。

季節的集落移動説は、春から秋にかけての水田耕作に従事する時期は低地の集落で生活し、収穫後の冬場は畑作や狩猟を主要な生産活動とするため生活の場を移動すると考える説である。高地性集落における集落の構成や出土遺物の内容が、低地の集落と何ら変わらないという事実を重視すれば、この季節的集落移動説は有力である。

当時の自然環境を検討しうるだけの資料は、まだ神戸市域では得られていないが、東の河内平野における調査結果や中国大陸における文献の調査結果によると、二世紀を中心とする時代は、高温多雨な期間とそれに続く急激な冷涼化の時期が推測されるといわれている。高温多雨な時期の平野部は、大小の河川の氾濫によって集落や水田の流失がしばしばおこり、それに対応する手段として台地上あるいは扇状地の高位への集落の移動、季節的な生産手段の変更などが行われたのであろう。

したがって高地性集落は、見張台、烽台のような性格を顕著にもつ遺跡、季節的に集落を移動させたような集落、洪水をさけて一時的に高所へ移動した集落など、個々にその集落のもつ性格を検討しなければならぬ。

2 低地の村と焼失竪穴住居群

集落立地 中期のはじめに出現し、中期後半に最も盛行する高地性集落は、東灘区東山遺跡のように後期の低地化に大規模化する例もなくはないが、後期の前半にはほとんどその姿を消してしまう。また、中

期末には、それまで使用されていた石鎌・石槍・石斧などの石器類もほとんど姿を消してしまい、ようやく金石併用の時代から鉄器の時代へと移行したことが知られる。

後期はじめの気温の冷涼化と、海面の低下に伴う臨海平野先端部の砂堆上の生活環境の安定化は、高地性集落の消滅と、新たな集落の低地への進出をうながした。そして金属器の普及によって、平野部の低地だけでなく、扇状地上や低位段丘部へも耕地のひろがりをはじめたことが推測できる。

低地への集落の進出は、東灘区深江北町遺跡のように、中期後半にすでに臨海平野先端の砂堆上へ進出する集落もあったが、長田区松野・神楽両遺跡のように、前期に集落が形成されていた地点が、一時期放棄され、後期になって再度集落が営まれる例が多い。

こうした遺跡の集落構成その他はまだ十分に明らかにされていないが、深江北町遺跡では、のちにふれるように後期末の円形周溝型墳丘墓群が発見されており、この砂堆上が比較的安定した環境であったことを示している。

こうした低地ばかりでなく、扇状地の末端部に新たに出現する集落もあるし、前・中期に集落が営まれて

いた低丘陵上や段丘上に再び集落が営まれる例も多い。

東灘区郡家遺跡は、山手幹線と弓場線の交差するあたりの標高約三五〇二五メートルの扇状地を中心に、東西・南北ともに数百メートルにおよぶ大遺跡であるが、中期には阪急電鉄御影駅近くで少量の遺物が発見されているだけで、本格的な集落の形成は後期に入ってからではないかと推定されている。

これまでに発見されている後期の遺構は、郡家城の前地点を中心に円形の堅穴住居や円形周溝型墳丘墓・方形周溝型墳丘墓、木棺墓、土器棺墓などが比較的场所を接して発見されている。そして国道以南の標高一五メートル以下の低地が水田として利用されていたらしい。なお、後期の集落立地はのちの古墳時代までひきつがれており、この時期以後こうした扇状地においてもそれほど居住環境に変化がおこらなかったであろうことを示している。

西神戸地域の

明石川流域でもこうした集落の低地化の傾向は同じで、標高八メートルあたりの低地に西

低地の集落

区吉田南遺跡が出現する。付近は明石川西岸の臨海平野で、前・中期には、西側の丘陵上に集落が営まれ、当時は水田として利用されていたと推定されるような低地に新しく集落が形成され、以後、古墳時代に入っても長く集落として利用されている。

吉田南遺跡の後期の遺構は、東側を流れる明石川に近く、旧河道や大溝によって区画された微高地上に位置し、後期の住居は円形または隅円方形の堅穴住居で、そのうちのひとつ昭和五十五年（一九八〇）に調査された5号住居址内からは中国の後漢時代の内行花文鏡の破片が発見されている。

山田川流域の大蔵山遺跡は、旧石器・縄文時代以来くりかえし居住地となっている複合遺跡であるが、弥

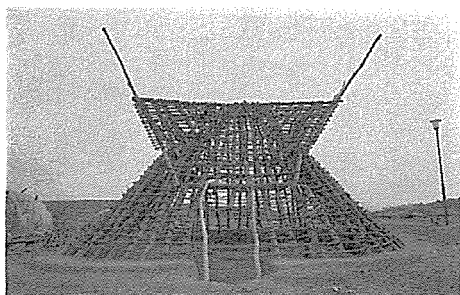


写真 96 弥生時代の復元住居
(垂水区大歳山遺跡)

生時代には前期後半と後期に居住地となっている点が臨海平野先端部の砂堆上の集落とよく似ている。

後期の遺構は東から西へむかっているびた台地の西半部に、方形の竪穴住居六棟以上が半円形ならんでいた。現在史跡公園として保存されている部分がある位置である。

いずれも焼失したのではないかと思われるような状態で炭化物が多く認められたが、竪穴住居を復元する資料を得るために調査した一棟は、一辺約六・五メートル、やや隅円方形で、壁面内側に溝をめぐらし、その内側に幅約一メートルのベッド状の部分があり、さらにその内側が一段さがって床面になっている。ベッド状の部分の内側四隅に柱をたて、住居の中心部には炉穴がある。また北側外壁の中央外側に、方形の突出部がついており、入口であろうと推定された。

竪穴住居の床面には柱や垂木などの建築材が炭化して残っており、それを参考にして多淵敏樹が復元設計を行ったものが遺跡あとの公園内に建っている竪穴住居である。

この竪穴住居からは、壺・甕・鉢・高坏・器台・ミニチュア土器などが総数五〇個近くも発見されて一住居内における土器の使用量を推定する手がかりをあたえてくれる。

明石川の支流伊川の中流西岸にある西区池上北遺跡は、標高約三〇メートルの低位段丘上に位置し、中期から後期へかけてのいくつかの竪穴住居や木棺墓が発見されているが、そのうち3号住居址と呼ばれている

竪穴住居は、直径約六・四メートルのやや胴張の隅円方形で、周囲にベッド状の部分があり、その内角に四本の柱を建てている。

この住居も出土土器から推定して後期末の住居であるがやはり焼失したらしく、柱のほかに垂木と推定される炭化した丸太材が四辺に対しては直角に、隅円部については放射状に認められた。

池上口ノ池遺跡は、明石川の支流伊川東岸の標高約五〇メートル、付近の水田との比高約三〇メートルの台地上に位置する集落で、東西約三〇〇メートル、南北約四〇〇メートルの台地上平坦面に総数六〇棟の竪穴住居が発見されているが、その内訳は、弥生時代中期の円形竪穴住居が九棟、後期末の隅円方形竪穴住居が五一棟であり、弥生時代後期前半の住居を欠いている。あたかも一時的に集落を移動させたのではないか、と思われるような状況である。

しかも、池上口ノ池遺跡では、中期の竪穴住居群も後期末の竪穴住居群もいずれもが火災にあつたらしく炭化材が多量に発見されている。

倭国内乱と同時

期の焼失住居群

こうした高地から低地へ再度居住地を移した後期の集落例をみると、焼失家屋の多さが目をひく。火災の原因については不明というほかないが、大歳山遺跡例や池上口ノ池遺跡例のように、一集落全体が焼失してしまっているような例をみると、あたかも戦乱によって集落が焼きはられてしまったのではないかというような印象を受ける。

弥生時代における軍事的緊張の時期といえ、『後漢書』『三国志』など中国の史書にみえる倭国乱あるいは倭国大乱と呼ばれている邪馬台国の女王卑弥呼をめぐる戦乱が思いおこされる。

『三国志』魏志倭人伝には、女王卑弥呼が登場するまでのこととして「其の國、本亦男子を以て王と為し、住まること七・八十年。倭國亂れ、相攻伐すること歴年」という記事と、卑弥呼の死後「更に男王を立てしも、國中服せず。更ごも相誅殺し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女壹与年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる」という二度の戦乱の記事がみえる。

さきの乱が弥生時代中期後半の高地性集落の盛行の時期と一致するかどうかはにわかに決しがたいが、卑弥呼没後の乱が弥生時代末期から古墳時代へかけての動乱の時代にあたっているであろうことはほぼ間違いないところであろう。

さきにふれた一集落全体が焼失してしまうような事例は、この時代が、いかに激動の時代であったかを如実に示しており、新しい時代への胎動の証であるといえよう。

第三節 祭祀と埋葬

1 銅鐸の祭り

銅鐸の祖型

銅鐸は、わが国において稲作農耕が開始され、金属器の使用が始まる弥生時代をあたかも象徴するような遺物である。

この銅と錫の合金である青銅でつくられたカネは、上部に半環状の吊り手(鈕)を取りつけ、その下部に扁円形の平面をもつ筒形の身をつけ、梵鐘をやや偏平にしたような特異な形状をもっており、おそらく稲作農耕の祭りに使用されたものではないかと推定されている。

銅鐸およびその鋳型は、西は北部九州から東は関東地方にまで広く分布しているが、畿内を中心として、すでに約五〇〇個が発見されながら、その使用法をはじめとして、謎につつまれた部分の多い遺物である。

それでは銅鐸はいつ、いつ、どこで、どのようにして造り始められたのであろうか。

銅鐸の祖型は、中国・朝鮮に広く分布する銅鈴だといわれている。なかでも朝鮮半島から四〇数例出土している小銅鐸と呼ばれている鈴を直接の祖型として日本の銅鐸はつくり始められたと推定される。それは弥

第三節 祭祀と埋葬

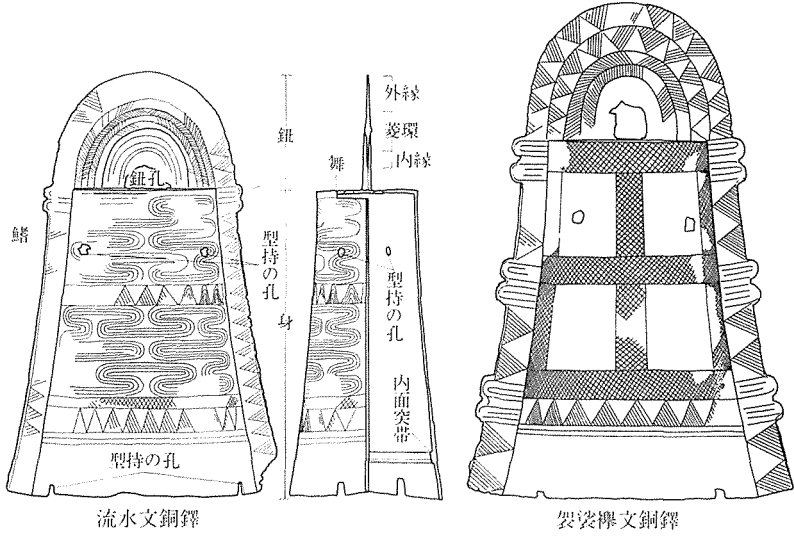


図 130 銅鐸の部分名称

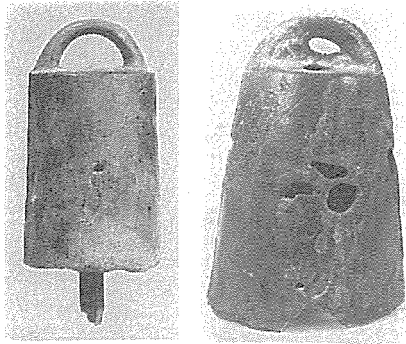


写真 97 朝鮮半島発見の小銅鐸
左：坪里洞発見
右：入室里発見

生時代前期後半のことである。

最古の銅鐸

初期の銅鐸は、朝鮮の小銅鐸と同じように石製鋳型で製作されていた。銅鐸を鑄^ひの部分でちょうど二つに割った形を鋳型に彫り込み、それを一つにあわせ、その中に銅鐸の厚みになる分だけの空間をあけて内型^{なかこ}をいれ、その空間に錫や鉛を合わせたものを流し込む。その場合、内型と外型との間の空間を一定にするため、型持^{かたもち}を身の両面の

上下と天井部(舞)に各二個とりつける。この型持の部分が銅鐸の身の両側や舞に孔となって残っている部分にあたるわけである。

これまでに知られている最も古い銅鐸は、身の上部の吊り手(鈕)の断面が太い菱形で、吊り下げて音を出す器物にふさわしい形をしており、菱環鈕式鐸と呼ばれている。

初期の銅鐸は、神戸市内ではまだ発見されていないが、神種鐸(飾磨郡夢前町神種西ノ谷出土)、中川原鐸(洲本市中川原町清水二ツ岩出土)、井向二号鐸(福井県坂井郡春江町井向島田出土)、荒神谷五号鐸(島根県簸川郡斐川町神庭出土)、高岡山鐸(三重県鈴鹿市高岡町出土)のように畿内周辺での出土が知られているほか、京都府鶏冠井遺跡から同時期の鋳型が発見されている。この鋳型は、砥石に転用されたのち、中期初頭の土器とともに廃棄されているので、畿内における銅鐸の製作開始が、前期末葉までさかのぼるであろうことは確実である。なお、この時期の銅鐸は、先の五例のほか、出土地不明のものが二例知られているのみで、その数はきわめて少ない。

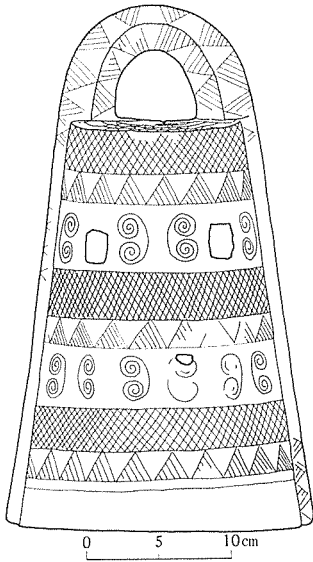


図 131 最古の銅鐸
(兵庫県神種遺跡)

西摂平野の 神戸市域とその周辺は、銅鐸発

銅鐸出土地 見数のきわめて多い地域である

が、ことに六甲山地南麓からその東辺の地域へかけては銅鐸出土数はとくに多い。

神戸市内では、投ヶ上遺跡(垂水区舞子坂三丁目)から一個、桜ヶ丘遺跡(灘区桜ヶ丘町)から一四

第三節 祭祀と埋葬

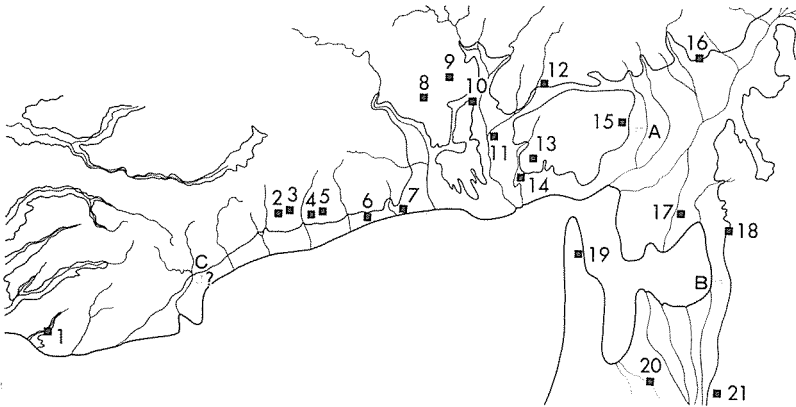


図 132 神戸周辺の銅鐸および銅鐸鋳型の発見地

- 銅鐸出土地 1 投ヶ上, 2 桜ヶ丘, 3 渦ヶ森, 4 生駒, 5 森, 6 堂ノ上, 7 津門, 8 中山, 9 満願寺, 10 栄根, 11 中村, 12 如意谷, 13 桜塚, 14 利倉, 15 山田, 16 天神山, 17 大和田, 18 四条坂, 19 長柄, 20 亀井, 21 恩智
- 鋳型出土地 A 東奈良, B 鬼虎川, C 楠・荒田

原図は：春成秀爾「銅鐸の時代」（一部改変）

個、渦ヶ森遺跡（東灘区渦森台一丁目）から一個、生駒遺跡（東灘区本山北町四丁目）から一個、森遺跡（東灘区森北町六丁目）から一個というように計五カ所から一八個もの銅鐸が出土しており、桜ヶ丘遺跡では銅鐸とともに七本の銅戈も出土している。

神戸市域以東でも、芦屋市の堂ノ上遺跡、西宮市の津門遺跡、宝塚市の中山遺跡（二個）、川西市の栄根遺跡、同市満願寺遺跡、伊丹市の中村遺跡、豊中市の桜塚遺跡（二個）、同市利倉遺跡、箕面市の如意谷遺跡で銅鐸が出土しており、東播平野に属する投ヶ上遺跡例を除いても、猪名川流域以西の西摂平野で三〇個近い発見例が知られている。

中期初頭 中期初頭になると、銅鐸の数は急増し
の銅鐸 形も、鈕の菱環部の外方に偏平な文様

帯がつき、身の両側に鱗と呼ばれる文様帯が続いた外縁付鈕式鐸と呼ばれるような形式に発達する。

この時期の銅鐸は、神戸市内では森遺跡から一個、

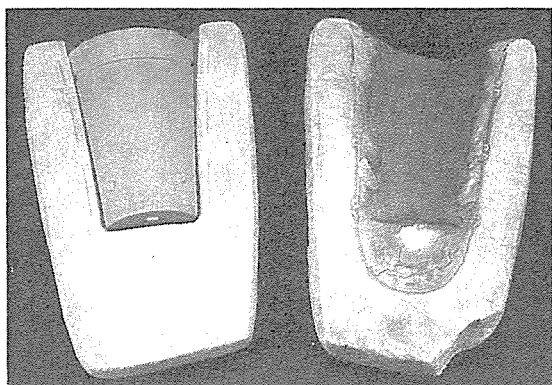


写真 98 銅鐸鑄型と内型の復元
(原品茨木市東奈良遺跡)

桜ヶ丘遺跡から四個出土しており、神戸市以東では芦屋市堂ノ上遺跡、伊丹市中村遺跡、宝塚市中山遺跡（二個）、豊中市桜塚遺跡、吹田市山田遺跡で出土しているほか、同形式の銅鐸鑄型が茨木市東奈良遺跡で発見されている。東奈良遺跡出土の鑄型のなかには、豊中市桜塚一号鐸および香川県我拝師山鐸の鑄型や豊岡市気比三号鐸の鑄型が含まれている。

この時期の銅鐸のなかには、同じ鑄型でつくられたと推定される銅鐸（同範鐸）が一〇数組知られている。たとえば、桜ヶ丘1号鐸は滋賀県新庄鐸や鳥取県泊鐸と同じ鑄型でつくられており、桜ヶ丘2号鐸は大阪府神於鐸と、桜ヶ丘3号鐸は鳥取県上屋敷鐸とそれぞれ同じ鑄型でつくられた銅鐸であることが知られているほか、森鐸も香川県出土と伝えられる一鐸と同じ鑄型でつくられたものであることが明らかになっている。こうした同じ鑄型でつくられた兄弟鐸の分布をみると、中期初頭に主要な銅鐸生産地であったことを示しているといえよう。

東奈良遺跡出土の銅鐸鑄型は、次の段階の姫路市名古山遺跡や赤穂市上高野遺跡出土の銅鐸鑄型と同じく凝灰質砂岩製であり、その原石は東は神戸市北区、西は小野市、南は神戸市須磨区、北は三田市相野の径約

二五キロメートルの範囲に分布する神戸層群中に含まれている凝灰質砂岩である。

こうした事実から、神戸市内に銅鐸生産地が存在するのではないかと推定も古くからなされており、中央区の楠・荒田遺跡からは、銅鐸鑄型の一部ではないかとみられる石片も発見されているが、まだ確実な例は見出されていない。今後の発見が期待される場所である。

中期中葉以降の銅鐸 次の段階に製作された銅鐸は、菱環の内外に装飾を付した形式で、扁平鈕式鐸と呼ばれており、おそらく中期中葉に製作が開始されたものであるといわれている。

この時期の銅鐸は、神戸市内では桜ヶ丘遺跡（二〇個）、生駒遺跡、渦ヶ森遺跡のほか東播平野に属する山田川流域の投ヶ上遺跡からも出土しており、数の増加と分布の広がりをみせている。また、神戸市域以東では、西宮市津門遺跡から出土しているが、それ以東では西摂平野での発見例はない。鑄型も石製から土製への変化・発展をとげる。

最後の銅鐸 中期末から後期にかけての銅鐸は著しく大きくなり、鈕もつり下げる機能を失い、菱環部も

二、三条の突線に変化してしまい、鈕や簾に大きな飾耳を付けたものが多くなる。

神戸市域では、突線鈕式鐸と呼ばれる時期の銅鐸は発見されていないが、猪名川流域およびそれ以東で七個も出土していて、時期による分布の著しい相違をみせている。

銅鐸の祭 銅鐸は、稲作農耕にかかわる祭りに使用された祭器だといわれている。しかしどの程度の範囲
祀圈 の村々によって祭られ、どのような祭りの場で使用されたのかという点は、いまだ不明な部分

が多い。

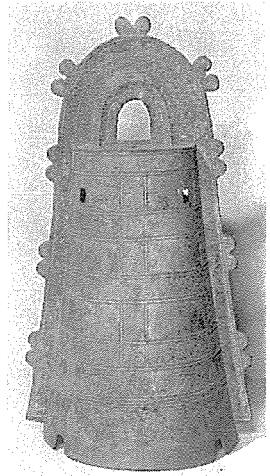


写真 99 新しい銅鐸
(川西市万願寺遺跡)

神戸市域とその周辺部の銅鐸分布は、そうした点の
解明にも好資料を提供しているといえよう。たとえば、
渦ヶ森鐸は、東は住吉川、西は石屋川によって区画さ
れた地域内の遺跡群と深い関連が推定できるし、森鐸
や生駒鐸は芦屋川・住吉川間の低地の村々や高地性集
落との深い関連がうかがえる。また、堂ノ上鐸は夙
川・芦屋川間の遺跡群と、津門鐸は夙川以東武庫川まで
の、面積が他の地域に比べてやや広いけれども、遺
跡の数は少ない地域と関連するのではないか、というよ
うにその分布を理解することができる。ただ、森鐸
および生駒鐸の出土地域のように、時期の異なる銅
鐸が地点を接して発見される場合をどのように理解す
るかについては未解決である。ここでは、一度形成され
た森鐸の祭祀圏ともいうべきまとまりが、何らかの理
由で瓦解し、生駒鐸によって、再度祭祀圏が形成され
たというふうに理解しておきたい。

以上のような解釈を、武庫川以東の地域についても試
みると、武庫川と猪名川間の遺跡群は、まず中期初
めに中山鐸を中心とする祭祀圏を形成し、中期中葉に
は、栄根鐸によってその祭祀圏は引き継がれ、中期末
には再度満願寺鐸による祭祀圏の再編成が行われたと
いうふうに理解できる。

猪名川以東の地域については、中期初めに中村鐸を
中心とする祭祀圏と、桜塚鐸を中心とする祭祀圏にわ
かれていたものが、後期にはいって如意谷鐸と利倉鐸
の祭祀圏に再編成されるというふうに推測できる。

こうした西摂平野の銅鐸分布をみると、武庫川と猪
名川にはさまれた東西約七・五キロメートル、南北

約五キロメートルの、現在の尼崎市域を中心とした平野部は、弥生遺跡が五〇カ所近くも存在するにもかかわらず、銅鐸が発見されていない。

こうした銅鐸未発見地域は、神戸市域の西端明石川流域についても指摘できる。ここでも五〇カ所以上の弥生遺跡が知られていながら銅鐸は未発見である。この両地域は、周辺地域に比しても特に弥生文化の発達した地域であって、農耕祭祀の中心であったと推定される銅鐸の祭祀がまったく行われなかったとはとうてい考えられない。ここでは、両地域ともに、今後複数の銅鐸が発見されるであろうことを推測しておきたい。

桜ヶ丘遺跡の性格

神戸市域においては、もう一カ所大きな銅鐸未発見地域がある。西は山田川流域の投ヶ上遺跡から東は石屋川上流の桜ヶ丘遺跡まで、実に二キロメートルにわたる地域である。

この地域については、かつて銅鐸を所有する村々が点在していたが、より大きな集団への統合の際に銅鐸は一カ所に集められた。それが桜ヶ丘遺跡の銅鐸一四個であるといわれている。そうしてみると、須磨の境川から妙法寺川を越えて旧葎川までのグループ、旧葎川から旧湊川までのグループ、旧湊川から旧生田川までのグループ、旧生田川から都賀川までのグループ、というように、それぞれの地域において銅鐸を中核とする祭祀圏を形成していた可能性が推定できる。

桜ヶ丘遺跡出土の銅鐸が、かつていくつのグループによって所有されていたかについては不明というほかないが、中期初めの外縁付鈕式鐸の段階に、まず四グループによって銅鐸がそれぞれ所有され、中期中葉以降さきの四グループに加えて、いくつかのグループが複数の扁平鈕式鐸を新たに所有したということである。

桜ヶ丘遺跡出土の銅鐸群の埋納状況については、のちに検討するが、一四個の銅鐸は二群にわかれて埋納されていた可能性が高い。したがって桜ヶ丘銅鐸群は、二時期にわけて集積されたのか、あるいは二カ所に集められた銅鐸群が、再度桜ヶ丘に集積されたのかのどちらかであろう。いずれにしても桜ヶ丘以西、須磨までの地域は、弥生時代のある段階までに、大きな二つのグループに再編されていた可能性が高い。

伝大月山

出土銅鐸

桜ヶ丘遺跡出土の銅鐸群については、なお一つの問題が残されている。桜ヶ丘遺跡の西約一・三キロメートルの灘区大月山から外縁付鈕式の流水文鐸が出土したと伝えられているからである。この銅鐸は、宝塚市中山寺出土の二鐸と同じ鑄型でつくられたもので現存している。

この大月山鐸の存在と、さきに述べた桜ヶ丘銅鐸群の集積埋納理由とをあわせて認めるためには、外縁付鈕式鐸は、次の扁平鈕式鐸の出現によって土中に埋納されてしまうものと、それ以後も祭器として使用されたものとの二者の存したことを認めざるをえない。いいかえれば、銅鐸は桜ヶ丘銅鐸群のように、弥生時代末期のある段階に埋納されたものと、それ以前のいくつかの段階に埋納されたものがあるということであろう。

三田盆地の

銅鐸鑄型

武庫川中流域の三田盆地も、約三〇カ所もの弥生遺跡が知られているながら、銅鐸未発見地域であった。しかし、昭和六十三年（一九八八）になって、三田市平方遺跡から小形ながら銅鐸鑄型および舌が発見され、この盆地の人々も中期後半には銅鐸およびその製作方法を知り、銅鐸祭祀をも行っていたであろうことが明らかになった。

平方遺跡から出土した銅鐸鑄型は、土製で焼きかためられており、一对で使用されるべき二個体が発見さ



写真 100 小形銅鐸の鋳型(三田市平方遺跡)

れている。鋳型の全長は九・五センチメートル、最大幅五・八センチメートル、厚さ二・五センチメートルで、この鋳型から製作される銅鐸は高さ八・七センチメートル、最大幅三・八センチメートル、厚さ二・八センチメートルである。

この銅鐸鋳型の文様は、鱗に付けられた鋸歯文が外向であること、四区袈裟襷文の両側の文様を欠いていることなど不十分な点はあるが、ある程度銅鐸および銅鐸製作技術を知っていた人たちが、実際に銅鐸をつくろうとして製作したものであることは間違いないだろう。ただし、この鋳型が、実際に使用されたかどうかは、今後の検討を待たなければならぬ。

この銅鐸鋳型のもう一つの重要性は、中期前半までの銅鐸鋳型の原材料である凝灰質砂岩の産出地に近いこの遺跡においても、中期後半にはすでに土製鋳型が採用されている点であり、銅鐸それ自身からの推測を裏付けている。

銅鐸の祭り

それでは、こうした銅鐸の祭りは、どのように行われ、どのような意義を有していたのだろうか。

銅鐸が青銅製のカネであり、梵鐘のように外側を叩いて音を発するのでなく、身の内部に舌と呼ばれる棒状のものを下げて、身を左右に動かして音を発する、いわばベルのようなものである

して舌をつり下げたものと推定される。

舌は、淡路の慶野中ノ御堂鐸や鳥取県泊鐸に、青銅製の棒の上端に紐を通す孔をもつ実例が伴っているほか、和歌山県太田黒田鐸には石の細い棒が伴っていて、舌ではないかといわれている。おそらく、青銅製のものにこだわらず、鉄、石、木など様々な材質のものが舌に利用されたのであろう。

また、銅鐸の内面下端近くには、内面突帯と呼ばれる突帯がめぐっており、なかには桜ヶ丘6号鐸のように三条の突帯をめぐらせているものもある。古い銅鐸のなかには、この内面突帯の中央部が、あたかも舌があたってすりへっているようにみえるものもあり、銅鐸が音を発する楽器であることの証拠だとされているが、いずれにしても、銅鐸は半鐘を連打

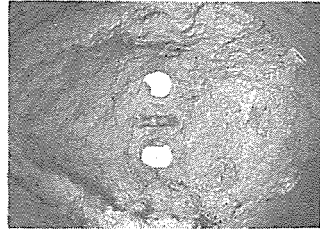
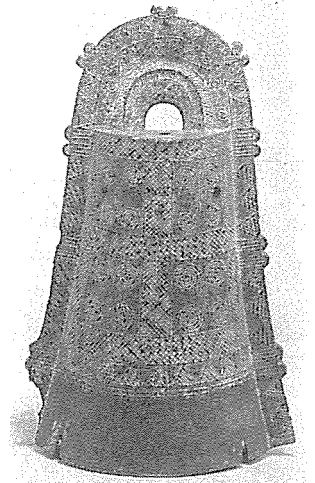


写真 101 環をつけた銅鐸
(東灘区渦ヶ森遺跡)

ことはあまり知られていない。舌をつり下げのために身の天井部内側に環を鑄出した例は渦ヶ森鐸など少数例が知られているが、大部分の銅鐸は、身の天井部にある二つの型持の穴を利用

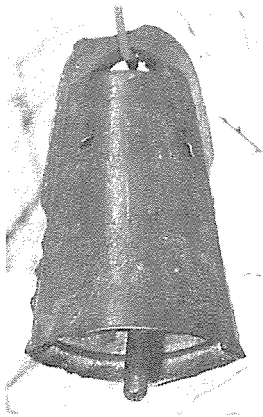


写真 102 舌を伴った銅鐸
(兵庫県中ノ御堂遺跡)

するような使い方はしなかったように思われる。おそらく、祭りのたびに、わずかな金属音を発したのではないだろうか。

それでは、銅鐸の祭りはどのようにして執り行われたのだろうか。そうした事実を知る手がかりはほとんどなく、わずかに佐賀県の川寄吉原遺跡から発見された銅鐸形土製品に描かれた絵画が、祭りの一端を具体的に表現している。

この銅鐸型土製品は下半が欠失しているが、頭に羽根をつけ、戈と盾を持ち、腰に刀をさした人物が描かれており、こうした鳥装のシャーマンと銅鐸の祭りは一対をなしていたのであろう。

桜ヶ丘遺跡のように銅鐸と武器形祭器の共伴例はそれほど多くはないが、単独で発見される銅鐸にもかかわらず木剣・木戈の類が共伴していた可能性は十分にある。

銅鐸の埋 先にふれたように、神戸を中心とした地域では、多数の銅鐸が発見されているが、いずれも埋納状況 納の状況については不明なものが多い。しかし、

桜ヶ丘遺跡の銅鐸・銅戈群だけは、発見者が複数であったこと、多数の遺物が一括出土したため、発見者に強烈な印象を与えたことによって、出土状況が比較的良好に記録できた例だということができる。

昭和三十九年（一九六四）年の瀬もおしつまった十二月十日の午後、灘区桜ヶ丘町の、標高二四〇メートルあまりの尾

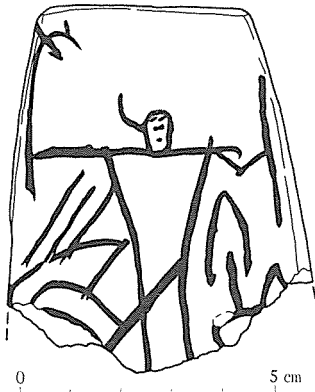


図 133 銅鐸型土製品に描かれた祭人
(佐賀県川寄吉原遺跡)



写真 103 発見直後の桜ヶ丘遺跡

根の東北斜面で、土取り作業中の鶴浜一男のツルハンに異様な金属器がひっかかったという。これが桜ヶ丘銅鐸・銅戈群発見の発端である。そして、鶴浜の同僚加藤茂美や近くにいた文永玉も加わって合計一四個の銅鐸と七本の銅戈が掘り出された。

銅鐸・銅戈群の出土地点は、六甲山南側の西北から南東へのびる尾根の稜線から二メートルばかり北側斜面を下ったところで、この地点からは東側の谷をへだてて芦屋・西宮方面の平野部がわずかに遠望できるだけで、他の三方は全く眺望がきかない。ただし、南側の稜線上に立てば、南約五〇〇メートルの地点に位置する高地性集落である桜ヶ丘B遺跡をはじめ平野部が一望のもとに見渡せるばかりでなく、大阪湾沿

岸全体を望むことができる。

これまでに知られている銅鐸の埋納地点の状況をみると、通常集落内の住居などからは出土しない。墳墓への埋葬例も知られていない。集落の近辺や低地からの出土もなくはないが、大多数は丘陵上に埋納された状態で発見されている。桜ヶ丘遺跡における状況は、一つの典型だということができる。

桜ヶ丘遺跡における銅鐸の埋納状態については、発見者からの聞きとりによって復元的に検討するほかな



写真 104 発見当時の桜ヶ丘銅鐸・銅戈

いが、銅鐸は北側の斜面の方向へ鈕をむけて埋納されていたものが多く、また、鱗を上下にして埋められていたものが多かったらしいが、なかには鱗を水平にして埋められていたものもあったという。

三名の発見者によって記憶にちがいがあがるが、銅鐸は横一列に並んで埋められていたともいい、俵を積み上げたような状態で重ねられていたともいわれる。また、一四個の銅鐸の間には一部すき間があつて銅鐸群は二群にわかれていたとも推定されている。

発見直後の現地調査で検出された銅鐸・銅戈群の埋納坑と推定される範囲は、東西約一・一メートル、南北約八五センチメートルであり、銅鐸すべてが鱗を上下にして横一列に並んでいたとしても、とうてい納まらない広さである。したがって、いくつかの銅鐸は、俵のように積み上げられていたであろうし、なかには入れ子になっていたものもあったという証言もある。なお、銅戈は東端の銅鐸の下に、七本が重ねられた状態で発見されたといわれている。

銅鐸埋納の意味 それでは、銅鐸は、いつ、いかなる理由で埋納されたのか。それでは、銅鐸は、いつ、いかなる理由で埋納されたのか。それでは、銅鐸は、いつ、いかなる理由で埋納されたのか。それでは、銅鐸は、いつ、いかなる理由で埋納されたのか。

遺跡をはじめとして、近年発見された銅鐸については、その出土状況が比較的よく明らかにされているけれども、なお未

解決の問題も多いというのが現状である。

銅鐸の埋納については、社会的な変革の時期に、一時にすべての銅鐸が埋納されたと考える説、銅鐸は日ごろ土中に埋められて保管されており、祭りの際に掘り起こして使用し、また埋めもどしてしまおうと考える説など、さまざまな解釈がなされている。前者は桜ヶ丘遺跡のような多量の銅鐸出土遺跡に対する解釈として、また埋納の時期が、弥生時代から古墳時代への変革の時期であると考える説に有利であり、後者は銅鐸の多くが単独で発見されることや、中国南部から東南アジアにかけて分布する銅鼓が、日ごろ土中に保管され、祭りの際だけ掘り出して使用するものがあることと対比して、魅力ある解釈となっている。いずれにしても弥生時代の終るころ、銅鐸は地上から姿を消しており、それは銅鐸を祀る祭儀から、鏡を中心とした祭儀への、祭りの形態の変化であり、古墳の築造開始に示されているような政治的変革の一つの表現であるといえよう。

銅鐸の絵画

桜ヶ丘遺跡発見の銅鐸・銅戈群の重要性は、こうした出土状況が比較的明瞭であるということとのほかに、出土銅鐸の中に絵画を鑄出した例を多く含んでいるという点があげられる。

この銅鐸に鑄出された絵画は、銅鐸の祭りの意味するところを明らかにする重要な糸口であると考えられるからである。

桜ヶ丘遺跡から出土した一四個の銅鐸のうち、1、2、3号鐸は流水文を施した外縁付鈕式鐸で、他の一個は袈裟櫛文鐸であり、そのうち12号鐸が外縁付鈕式鐸、他はすべて扁平鈕式鐸である。

1号鐸は、身の中央よりやや上部に絵画帯があり、その上下に流水文と呼びならわされている曲線文が施

第三節 祭祀と埋葬

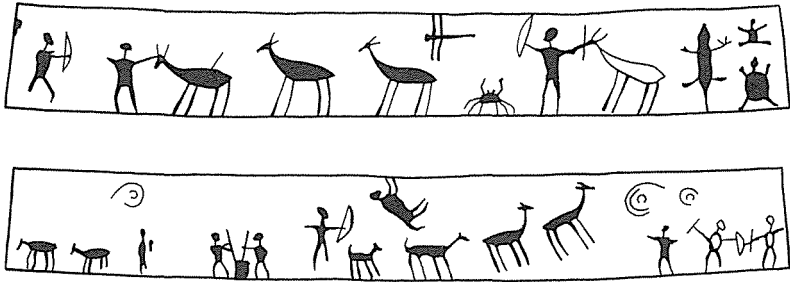


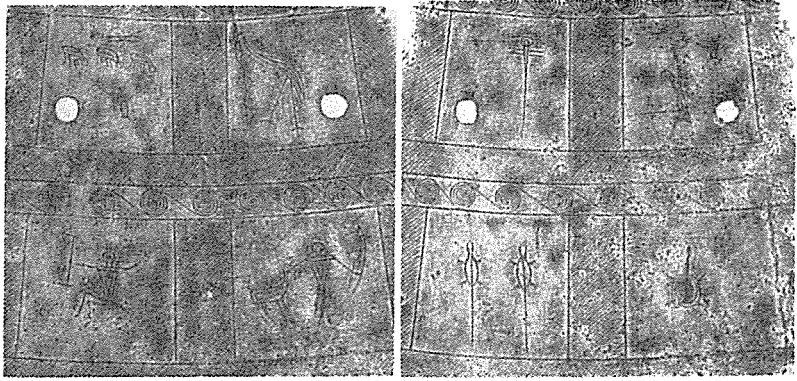
図 134 桜ヶ丘1号銅鐸の絵画

されており、滋賀県新庄鐸、鳥取県泊鐸ほか二鐸と同じ鑄型で鑄造されたものであることが知られている。

絵画帯の絵を、桜ヶ丘鐸で不明瞭なところを他の銅鐸で補いながら示すことと次のおりである。

まず、A面と呼ばれる側の絵画は、左端に二頭の動物と一人の人物が並んでおり、その上部に渦卷文、その右に堅杵を持って脱殻している二人の人物、中央部には弓を持つ人物が四頭のシカを追っており、その上部にサルと思われる動物がぶら下がり、右端には弓を持つ人物を中心に三人の人物が並び、その上部も渦卷文が鑄出されている。

また、B面は左端に弓を持つ人物、その右に矢を背中に負ったシカを捕らえる人物とそれに続く二頭のシカ、中央上部にはトンボ、その右下にカニ、そしてその右に弓を持ちシカを捕らえている人物、右端にはトカゲ、スッポンなど三匹の動物というように、あたかも一卷の絵巻物をみるように絵画が一周している。なお身の上部の舞の部分にも幾人もの人物が鑄出されている。2号鐸の絵画は、1号鐸ほど複雑ではないが、上下の流水文帯に囲まれた身の中央部を、A面では右から左へ、B面では左から右へ、表裏とも同じ方向へシカが走りぬけているように描かれている。また、鈕にも流水文やトン



号銅鐸 右同 4号銅鐸

ボの絵がみえる。

こうした外縁付鈕式鐸の絵画をさらに発展させ、一歩進めたのが扁平鈕式鐸のいくつかにみられる絵画だといえよう。

桜ヶ丘出土銅鐸のうち4号鐸、5号鐸と名付けられている二つの銅鐸には、身の両面の袈裟禪文で囲まれた四区画内すべてに線描の絵画が鑄出されている。

まず、4号鐸の絵画についてみると、一方の面の右上にはサカナをくわえたサギ(またはツル)、左上には水をのんでいるような三匹の動物とクモ、左下には工字状器具をもつ人物、右下には弓をもちシカを捕えている人物が描かれ、他の面には右上にクモとカマキリ、左上にトンボ、左下にトカゲ(またはイモリ)、右下にスッポン(またはカメ)がそれぞれ描かれている。また、この銅鐸の裾には両面ともに親子のシカの列が描かれている。

5号鐸の絵画は、一方の右上にカエル、クモ、カマキリ、左上にカエルの足をくわえるへびとそれを追う人物、左下には三人の争っているような人物、右下には弓をもち、シカを捕えている人物を描き、他の面の右上にトンボとトカゲ(またはイモリ)、左上

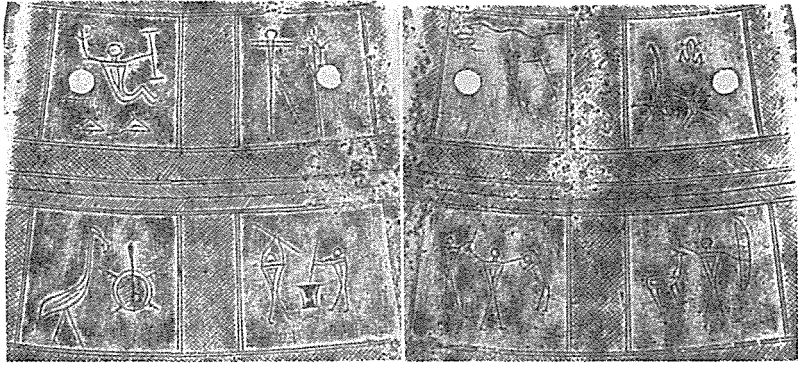


写真 105 銅鐸の絵画 左桜ヶ丘 5

に工字状器具をもつ人物とサカナ、左下にスッポン（またはカメ）とサカナをくわえたサギ（またはツル）、右下に堅杵を持って脱穀をする二人の人物がそれぞれ描かれている。

こうした4号・5号鐸とよく似た絵画をもつ銅鐸は、他に二例知られている。一つは、香川県出土と伝えられる銅鐸で、現在東京国立博物館に所蔵されており、身の両面の各六区画にそれぞれ絵画を鑄出している。この銅鐸の絵画のなかには、シカを弓で射る人物、五匹のイヌに囲まれたイノシシを射る人物、高床の建物など桜ヶ丘の二鐸にはない重要な絵画を含んでいる。

他の一つは江戸時代の文人画家谷文晁の旧蔵品で、現在東京大学に拓本が残されているものであり、先の三鐸によく似た絵画をもつ四区画袈裟釋文鐸である。

農耕讃歌

このような四個の銅鐸に描かれた絵画は、何を物語り、どのように解釈できるのだろうか。この絵画こそが謎の遺物といわれる銅鐸の祭りの意味・内容を解き明かしてくれる鍵をにぎっているのではなからうか。

これまでに、銅鐸の絵画について説かれているところは多いが、

弥生人の生活環境を風物詩的に描いたのではないかと考える説、春夏秋冬の年中行事や季節感を表現したのではないかという説、狩猟・漁撈の生活から農耕社会への変化を讃える、いわば農耕讃歌を表わしたものと考える説、あるいは、これらの絵画を原始的な絵文字だと考える説などさまざまである。

そうしたなかで

空を飛ぶトンボ、草にとまるカマキリ、木に巣をつくるクモ、地をはうトカゲ、水をおよぐカメ、沼をわたるサギ、およそ生きとし生けるものたちは、おのれが生きるためには、他の生きものを食わねばならぬさだめをもつ。われわれ人間もまた、かつては弓矢をとって猪や鹿を狩り、その肉を食って生命をつないできたが、神の教えのままに稲をつくるようになったいまは、秋ごとに豊かな収穫をえて、食料は倉に満ちている。(小林行雄『女王国の出現』)

という農耕讃歌を表現したものであるという説が、ここに表わされたすべての絵画を包括的に解釈できる説ということができる。したがって、銅鐸は秋の稔りみかをもたらした神の恵みに感謝する祭りまつりで、高質の余韻をもった音色を山野に響かせたのではないかと推定されるのである。

2 武器形祭器と銅鏡

同一化する銅剣
と銅鐸の分布圏

銅剣・銅矛・銅戈などの武器形の祭器は、北部九州を中心に分布し、大阪湾沿岸地域・大和盆地・山城盆地など、のちに畿内と呼ばれる地域を中心に分布する銅鐸とは相対立

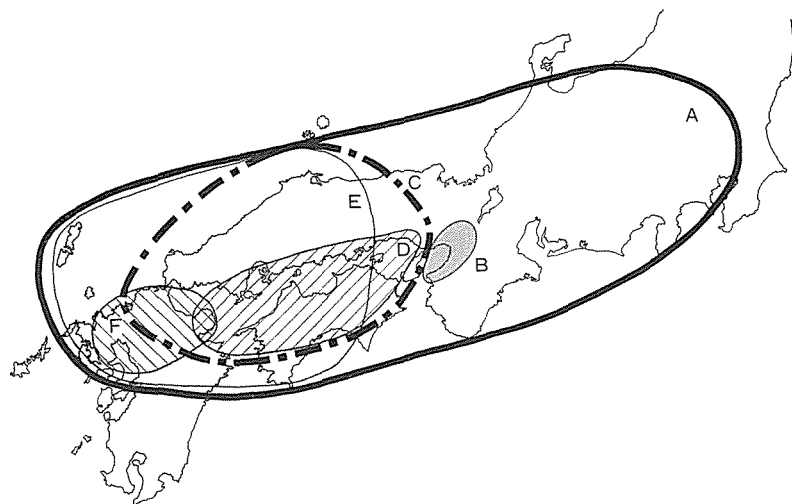


図 135 青銅製祭器の分布図

A：銅鐸分布圏、B：大阪湾型銅戈分布圏、C：中細・中広形銅剣分布圏
D：平形銅剣分布圏、E：銅鉾分布圏、F：九州型銅戈分布圏

する分布域をもち、両地域の政治的対立をも示しているのではないかといわれてきた。

しかし、最近の相次ぐ新資料の発見は、両者の分布の空白地帯をうずめ、相対立するものというよりも、むしろ同一分布圏内における器種分布のかたよりとして理解すべきであることを示している。

たとえば、かつては九州には銅鐸は存在しなかったであろうと推定されていたが、北部九州において銅鐸型の発見が相次いでおり、この地で中期に銅鐸が製作されていたことは事実となった。

また、これまで銅矛の確実な発見例が知られていなかった出雲平野の島根県荒神谷遺跡で銅矛一六本と銅鐸六個が共存し、しかも、数メートルはなれた地点から銅剣が三五八本も発見されている。この銅剣三五八本という数字は、荒神谷遺跡発見以前の青銅製武器の発見総数を越えるものである。

こうした最近の状況をふまえて作成したのが図135の青銅器分布図である。

この分布図に示されている通り、東は関東地方から西は北部九州までひろがる銅鐸の分布圏内の西半部に青銅製武器が分布している。

大阪湾沿岸地域および東部瀬戸内地域に属する神戸市域およびその周辺では、尼崎市田能遺跡で中期中葉(Ⅲ期)に属する銅劍の鋳型が発見されており、この時期に青銅製武器が製作され始めていたことは確実である。

中期中葉の青銅製武器は、淡路の西淡町古津呂遺跡で一三本の銅劍が一括出土していて、銅鐸と同様に祭器として使用された可能性を示しているほか、西区玉津田中遺跡で銅劍の先端部が、あたかも人体にささっていたのではないかと推定される状態で木棺内から発見されている。この段階における青銅製武器は、祭器としての使用がはじまるとともに、それ以前の中国・朝鮮で鋳造された武器(舶載青銅器)と同様に、実用的な武器として利用されていた可能性を示している。

金属器を模し

また、中期中葉には石や木で青銅製武器を模したいわゆる石劍・石戈や木劍・木戈が和泉

た石劍・石戈

平野・大和盆地・山城盆地・琵琶湖西岸・若狭湾を結ぶあたりまでに分布しており、青銅

製武器分布圏の東辺を形成していることが知られる。

石劍のなかには身の断面の中央に突起をつくり、その両側に溝をつけて銅劍を忠実にまねた銅劍型の石劍と、断面が偏平な菱形の鉄劍を模したと思われるものと二種類ある。

神戸市域では、灘区伯母野山遺跡、西区養田中の池遺跡、西神第38号遺跡、北区かまや鑄射山遺跡で銅劍型石劍

が出土しているほか、西区頭高山遺跡^{つづらぎ}発見と推定される銅剣型石剣が知られている。これらの出土地をみると伯母野山・頭高山の両遺跡は、さきにふれたとおり、典型的な高地性集落であり、養田中の池遺跡は標高約九〇メートル、水田との比高約三五メートルの丘陵上の遺跡である。鐫射山遺跡も石剣出土地付近から土器が発見されていて、高地性集落(標高約二六〇メートル、水田との比高約一二〇メートル)ではないかといわれている。

いずれも集落内からの発見であり、銅鐸とはやや異なった祭祀に使用されたものであろう。

鉄剣型石剣は銅剣型石剣と同じ頭高山遺跡から発見されているほか西区池上口ノ池遺跡(標高約五〇メートル、水田との比高約三〇メートル)や西区青谷遺跡(標高約七〇メートル、水田との比高約五〇メートル)、北区塩田遺跡などからも発見されている。なお、青谷遺跡からは石戈や弥生時代の日本製の銅鏡も発見されている。

大阪湾型 大阪湾周辺部では、中期後半には銅剣のほか新たに銅戈の製作もはじまり、銅鐸とともに祭

銅戈 器の多様な展開をみせている。

桜ヶ丘遺跡から一四個の銅鐸とともに発見された七本の銅戈は、いずれも二八センチメートル前後の扁平な祭祀用の製品で、樋を飾る文様が複合鋸歯文と呼ばれる文様であることが特徴で、北九州に分布する銅戈が、樋を綾形文が飾っていることと著しく対象的である。

桜ヶ丘出土の銅戈と同じような文様で飾られた銅戈の分布をみると、東灘区保久良神社遺跡、高槻市大塚町淀川河川敷遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡^{うりゅうどう}、有田市箕島町山地遺跡など西摂平野、淀川流域、河内平野、紀伊半島から発見されており、大阪湾型銅戈と呼ばれている。

大阪湾型銅戈の鋳型は東奈良遺跡から粘土製の鋳型が発見されているが、同遺跡発見の銅鐸鋳型で製作されたと推定される銅鐸が西摂平野の豊中市桜塚、讃岐平野の善通寺市我拝師山、日本海沿岸の豊岡市気比などから発見されているところから、今後、大阪湾型銅戈もまたより広範囲な地域で発見される可能性もっている。なお、この大阪湾型銅戈と同じ複合鋸歯文で飾られている青銅器には、淡路島の西淡町古津呂遺跡発見の銅劍、桜ヶ丘遺跡発見の銅鐸などがあり、両者が同一工人ないしは同一工人集団によって製作された可能性を示している。

弥生時代 弥生時代の銅鏡は、まず朝鮮半島製の鏡が伝えられ、続いて多くの中国製の鏡がわが国にもたの銅鏡 らされている。中国製の鏡の多くは北九州の弥生時代墳墓に副葬されているが、大阪湾沿岸地域を中心としたのちに畿内と呼ばれるような地域の弥生時代墳墓からは発見されていない。

したがって弥生時代の大阪湾沿岸地域を中心とした地域には中国製の鏡は伝えられなかったのではないかとわかってきたが、近年の調査では、各地で実例が増えつつあり、神戸市域でも東灘区森北町遺跡から破片ながら中国の前漢時代（紀元前二〇六～紀元後七年）につくられた鏡が発見されているほか大阪市瓜破北遺跡でも同時代の鏡片が発見されている。

後漢時代の鏡については北九州では依然として墳墓への副葬が続いているが、大阪湾沿岸部や大和盆地では墳墓に副葬されることなく代々伝えられ、のちの古墳に副葬されたい。こうした鏡を伝世鏡と呼んでいる。

一方、日本においても弥生時代に鏡の製造ははじまっているが、その製品はいずれも小形で「小形仿製鏡」

と呼びならわされている。この弥生時代の小形仿製鏡は北部九州に発見例が多いが、その分布は広く、東は群馬・新潟あたりまでひろがっていて、神戸市域では、西区青谷遺跡で一面発見されている。

そのほか祭祀にかかわる遺物としては、兵庫区熊野町河原遺跡で発見された四〇個近い貝輪が注目される。大正七年（一九一八）に発見されたこの貝輪は、弥生時代中期の壺に入れられ、高坏で蓋をして埋められていたらしいが、そのうち二個が現在も京都大学文学部博物館に所蔵されていて、ゴホウラ製であることが知られている。

ゴホウラという貝は、現在は琉球列島を北限としているが、弥生時代には九州南端あたりでも採取された可能性がある。いずれにしても南九州の産物が、瀬戸内を通過して六甲山地南麓まで届いていたことを示している。そして、祭りの場では、いくつもの腕輪がシャーマンの腕を飾り音をたて祭りの雰囲気を一層もりあげたのであろう。

なお、垂水区大歳山遺跡では人面土器片が発見されていて、祭祀的な遺物であろうと推定されている。

3 共同墓地から墳丘墓へ

弥生時代 採集・狩猟・漁撈を主要な生産手段とする旧石器・縄文時代においても、新たな稲作農耕とい
の墓制 う生産手段を獲得した弥生時代においても、人はその生命を終えると、それぞれの集団の共同

墓地に葬られる。

弥生時代の墓制は、共同墓地のなから特定の集団墓が出現し、さらにそのなから個人墓が出現してくる過程だといえることがいえよう。

稲作農耕の開始と発展は、均質的な共同体社会のなかに、必然的に貧富や階層差を生ぜしめ、墳墓に厚葬の風を成立させたが、共同墓地内における特定の棺の厚葬化がみられ、副葬品が出現し、埋葬施設を覆う墳丘があらわれる。方形あるいは円形に溝をめぐらし、その内部に盛土を施す周溝型の墳丘墓、丘陵の一部を台状に削り出し、さらに盛土を施した台状型の墳丘墓、主として盛土によって墳丘を形成するもの、墳丘斜面に石を葺いて厚葬化をはかったものなど、いわゆる墳丘墓（のちの古墳や外国の墳丘をもつ墳墓と区別するため「弥生墳丘墓」と呼ぶこともある）が西日本各地に出現する。

大阪府茨木市東奈良遺跡や和泉市池上遺跡では、前期中葉以降に集落の一部に方形周溝型墳丘墓が出現しているし、京都府峰山町七尾遺跡では丘陵上に築かれた前期後半の方形台状型墳丘墓が知られている。

こうした新しい墓制の成立は、弥生文化の諸要素の一つとして、稲作農耕技術とともに大陸・朝鮮半島の影響を受けて成立したものか、わが国の弥生文化の発展のなかで醸成されてきたものかは、まだ十分に明らかにしたがたいが、畿内においてはじめて出現したことは明らかである。

土壙墓群

神戸市域では、西区常本遺跡で発見された弥生時代前期後半の土坑群が、農耕社会最古の共同墓地である。

常本遺跡における共同墓地は、調査区域がそれほど広くはないので、土壙墓四基および墓址と推定される土壙二基が発見されているだけであるが、それらの土壙群は同時期の竪穴住居址群に隣接した位置にあり、

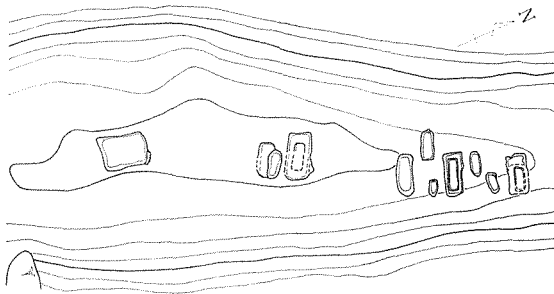


図 136 弥生時代の土壙墓群(西区西神第47号遺跡)

集落の一角を占めていたことが知られる。土壙墓は長さ一・五メートル、幅一メートル程度の土壙内に長さ一メートル、幅四〇センチメートル程度の木棺の痕跡を残しており、壺の底部を欠いたものが供えられていたものもある。

こうした共同墓地にあつては、埋葬施設はおおむね均質的で、副葬品の顕著な例はほとんどないが、他地域では前期後半に、箱式石棺内に青銅製の鏡や武器を副葬した山口県梶栗浜遺跡の例もあり、早くも集団内における階層の分化が進んでいることを示している。

中期に入っても、一般的な墓地は木棺墓・土壙墓などの群在する共同墓が多く、市内では西区繁田の西神第47号遺跡にその実例をみることもできる。

この西神第47号遺跡は、標高約七〇メートル付近の丘陵上にあり、比高二〇〜三〇メートル程度の明石川兩岸の低地を見下ろす位置を占めている。墓域は南北約二〇メートル、幅約六メートル程度の尾根上の平坦面で、その北半に二群計一一基の墓壙が存在する。北側の一群には、八基の墓壙があり、さらに二小群にわかれる可能性があり、南側の一群には三基の墓壙がある。そのうち大きな墓壙には木棺の痕跡が認められ、北側の一群内には二基、南側の群内にも一基、木棺の痕跡が認められる。この墓壙群の時期は、南側の墓壙群に伴っている土器の形式から、中期後半に属すること

が知られるが、この土器片のほかに、副葬品は全く検出されていない。

この墓壙群を残した集落がどこに求められるかは定かではないが、一般的傾向から見ると、西側の低地に求めるべきであり、山麓の繁田遺跡がその候補地として最も可能性が高い。しかし繁田遺跡には、周囲に溝をめぐらせた墳墓と推定される遺構が検出されているので、西神第47号遺跡よりもさらに南側の高所に位置する西神第50号遺跡がこの墓壙群を残した集団の集落である可能性も残されている。

墳丘墓

神戸市域では、前期の方形周溝型墳丘墓が西区玉津田中遺跡で最近発見されたのをはじめ、中期になると、各地でその実例が知られている。

明石川下流東岸の低地に位置する西区新方遺跡では、円形周溝型墳丘墓の墳丘斜面に円礫を葺いた例が知られている。調査区域が狭いため埋葬の状況など不明な点が多いが、葺石を施した墳墓としては、わが国で最も古い例であろう。おそらく、のちの古墳の葺石につながる現象が、中期に出現していることを示す好例である。

新方遺跡の北方約三・五キロメートルの同川流域低地に立地する西区玉津田中遺跡でも、約三〇基の中期の方形周溝型墳丘墓群が、住居群水田址と隣接して一つの集落を形成して

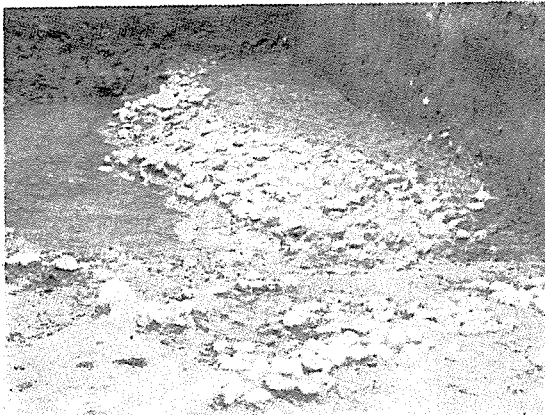


写真 106 円礫を葺いた円形周溝型墳丘墓
(西区新方遺跡)

第三節 祭祀と埋葬

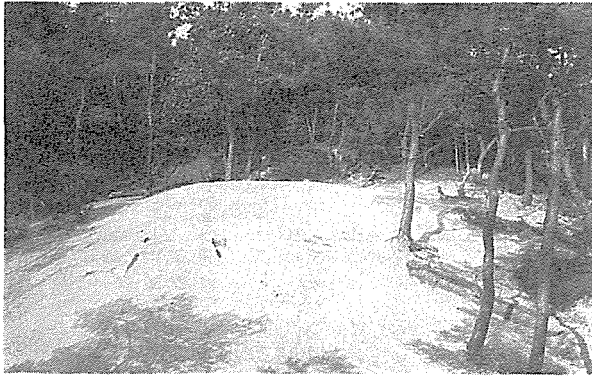


写真 107 方形台状型墳丘墓(西区西神第40号遺跡)

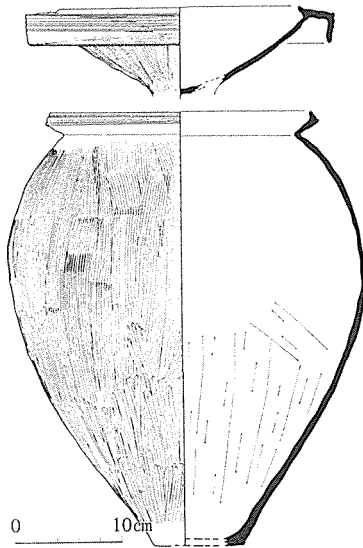


図 137 土器棺実測図
(西区西神第40号遺跡)

こうした墳丘墓の一墳丘内における埋葬数が明らかでない例はそれほど多くはないが、この墳丘墓では大人の埋葬施設と推定される二つの木棺の痕跡と、子供の埋葬と推定される施設一つとの計三カ所の埋葬施設が存在する墳丘が、二基並んで発見されており、二つの木棺の痕跡にはそれぞれ大小があり、あたかも一組の夫婦とその幼い

いることが知られている。特に墳丘墓群は隣あった墳墓が溝を共有しながら群在しており、さらに増加する可能性が高く、総数は五〇基程度と推定されている。

また、明石川上流東岸の西区繁田にある西神第40号遺跡では、付近の水田との比高約一五メートルの丘陵上で、地山を削り出した方形の墳丘墓が二基ならんでいるのが発見されている。

子供が同一墳丘内に葬られた家族墓であることを示しているように思われる。

こうした中期の弥生墳丘墓は、市内では明石川流域ばかりでなく、六甲山南麓一帯や、武庫川流域の三田盆地でも、その例が知られつつある。

JR三ノ宮駅東側の雲井遺跡は、標高約一二メートルばかりの旧生田川によって形成された扇状地の末端に位置し、これまでの調査で六基以上の方形周溝型墳丘墓が発見されている。ここでは墳丘の上半部がすでに削り取られてしまっているので、埋葬数など不明な点が多いが、一墳に一埋葬である可能性もあり、中期後半には墳丘墓群のなかにも新しい動きがあらわれはじめていることが知られる。なお、雲井遺跡の方形周溝型墳丘墓を残した集落は、墳墓群の東北部にひろがる旧生田川の扇状地上に位置していたであろう。

後期の墳丘墓の特色をよく示しているのは、東灘区深江北町遺跡で発見された一一基の円形周溝型墳丘墓である。

深江北町遺跡は臨海平野の先端に形成された砂堆上に立地する遺跡で、発見された墳丘墓は、直径が七～八メートル、周溝の幅〇・七～二メートル、深さ三〇～四〇センチメートルのものが一般的で、それよりもやや小形のものも若干認められる。周囲の溝は完全に一周するのではなく、通路状に溝が途切れたところが各一カ所ずつ認められる。そして隣あった周溝を一部共有しているものも多い。

埋葬施設は、墳丘墓ごとに各一基の土壙墓が設けられており、なかには土器棺を収めたものもあり、各墳丘ごとに、大人・子供を問わず各一人ずつの埋葬を行っていた可能性を示している。なお、当時の住居群の位置は明らかではないが、北側の後背湿地で水田が認められているので、さらに北側の扇状地末端あたりに

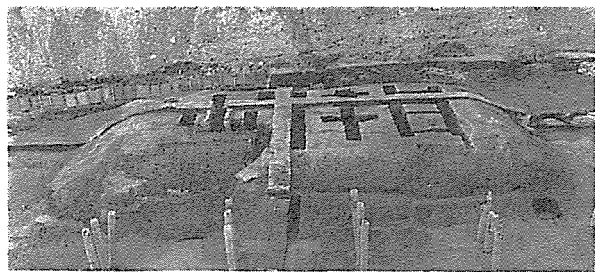


写真 108 大形墳丘墓 (大阪市加美Y1号墓)

集落の中心が位置していたのではないかと推定される。

大形墳丘墓

中期以来墓制のなかに大きな変化が現われ始める。大型墳丘墓の出現である。神戸市域では、まだその傾向は把握できていないが、大阪市加美^{かみ}遺跡では、墳丘の規模が南北約二六メートル、東西約一五メートル、高さ約三メートル、周囲に幅六〜一〇メートル、深さ約一メートルの方形の溝をめぐらした墳墓が発見されている。この加美Y1号墓は、南北約二二メートル、東西約一一メートルの墳頂平坦面に総数二三基もの木棺墓が確認され、そのなかには九基もの子供用の棺と推定される小形木棺を含んでいる点が注目される。

墳丘中央には、底板をのぞく蓋板・側板・小口板がいずれも二重になった棺が認められ、他の埋葬に比して卓越した被葬者がこの時期に出現しつつあることを示している。また、Y1号墓の南側には、墳丘の高さは若干低いと同規模の墳丘墓が存している。こうした事実は、中期後半に、群在する家族墓のなかに、著しく卓越した被葬者があらわれつつあるけれども、共同墓地のなかから独立した墳墓はまだ出現していないことを示すものであろう。

後期になると西日本各地で、さらに大形の墳丘墓の数と分布が拡大する。岡山県倉敷市の楯築墳丘墓は、直径約四三メートル、高さ約五メートルの円丘の二方向に通路状の突出部を付す全長七〇メートル以上の大形墳丘墓で、

中心部の埋葬施設は長径約九メートル、短径約五・五メートル、深さ約一・八メートルの墓壇内に木槨もつかを築き、その内部に木棺を収めるという大規模なものであることが知られている。

また、鳥根県西谷3号墳丘墓は、方形の四隅が通路状に突出した、いわゆる四隅突出型の墳丘墓であるが、四七×三九メートル、高さ約五メートル程度の規模をもち、中心の埋葬施設は木槨である。

弥生時代の墓制について、『三国志』魏志倭人伝には、「其の死には棺有るも槨無く、土を封じて冢を作る」と記しており、わが国では本来槨室がなかったことを示している。こうした新しい木槨や石室の出現は、おそらく中国・朝鮮における墓制と深くかわる事柄であろう。

このような大型墳丘墓は、その規模に若干の違いこそあれ、西日本各地に出現しており、やがて出現する巨大な前方後円墳築造の時代の、政治的・経済的基盤が各地で蓄積されつつあることを示している。